
この先の結末

みほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この先の結末

【Nコード】

N1444V

【作者名】

みほ

【あらすじ】

あたし、あかり。幼馴染の雄輔とは腐れ縁。よく知りすぎているが故にすれ違う恋心の結末はいかに？
アメブロでも公開中です。

？

あたしと雄輔は幼い頃から仲良しだった。

家は近所ではなかったけど

幼稚園でも小学校でも

なぜか同じクラスで

あたし達はなぜかよく隣の席になった。

「なんだ、またお前とかよ。」

席替えの時、雄輔が楽しそうに言う声、

今でもよく覚えてる。

「先生！またあたし、雄輔と隣です！」

あたしの抗議もむなしく

「雄輔くんを頼むわね。よろしく」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「やだ。。。。」

「うつせーぞ！」

また算数の答え、教えろよな」

やんちゃんな雄輔のおもり役ですか・・・あたしは。

中学校に行くと、

さすがにクラスは離れた。

雄輔は野球部。

あたしはソフトテニス部に入った。

狭い校庭は、時々フェンスがあるにもかかわらず

ボールがあちこちに飛び出して行く。

野球のボールがテニスコートに来ることも珍しくない。

「あかり、そのボールとって。」

フェンスの向こうで雄輔があたしを呼ぶ。

「え　　。メイワク……」

そう言いながらも、フェンスの上をめがけて

野球ボールを投げた。

「ヘッタクソ！ちゃんと投げれねーの？」

ニツと笑う雄輔。

なぜかボールはあたしの足元に落ちてきている。

「うるさいわね。ちゃんと出来るわよ！」

足元のボールを拾い、斜め上に投げた。

今度はちゃんとフェンスを乗り越えて

雄輔のもとへとボールは飛んで行った。

「サンキュ」 やれば出来んじゃない。」

軽く手をあげてニコツと笑った雄輔に

なぜか胸がキュンとなった。

それがあたしの初恋だった。

？

それから、特にあたし達の関係は
変わることはなかった。

「おい！あかり」。

数学のノートうつさせろよ。」

雄輔が教室の後ろの入口から声をかける。

「何で自分でやんないのよ！」

「オレ、バカだから」

ニコッと笑うその顔を見ると

ズキユンと胸に衝撃が走る。

中学に入ってからクラスが違うのに

なんだかんだ言っでは

雄輔はあたしのクラスにやってくる。

ま、同じ野球部の隼人がいるからなんだけど。

「オレのノート貸そうか？」

あたしの複雑な顔に気付いた隼人は
気を遣ってそう言った。

「ボケ！お前のノートなんか写したら

間違いだらけでなんも分かんねーだろー！」

漫才みたいにバコンって丸めたノートで

頭をはたきながら雄輔が言った。

「いいよ。別に。ほら、汚すんじゃないよ！」

あたしは努めて平静を装って

雄輔にノートを渡す。

「サンキュー」

あたしのノートをゲットして教室に戻る雄輔の後ろ姿を

同じクラスの女の子たちが

甘いため息で見送っていた。

「あかりはいいよね〜」。

雄輔君と仲良しで……

あたしもお話したい……」

苦笑いしながらあたしはそれらを聞き流した。

確かに、カッコいい。

最近特に背も高くなってきて

気付けばあたしより随分背が高くなっている。

何げなく触れた腕も

思いがけず逞しくて

思わず手を引っ込めてしまつうようになった。

何も意識せずにじゃれあえた小学生の頃が

無性に懐かしい……

「ねえ、あかり、雄輔と付き合つてんの？」

隼人に聞かれて

「あんたバツカじゃない？」

何であたしがアイツと付き合つわけ？」

必死で否定すると、

「だよな……相手は雄輔だしな……」

と、妙に納得された。

.....

それはそれで複雑だったりすんのよね。

```
>a href="http://www.alphapolis.  
co.jp/content/access2.php?citi  
co  
ntid="209016269"target="blan  
k">img src="http://www.alphap  
olis.co.jp/content/access.php?cit  
i  
contentid="209016269&amp;size"8  
8"width="88"height="31"bord  
er="0">/a<
```

？

2年生になったあたし達は

また同じクラスになった。

なぜか隼人も同じクラスで腐れ縁。

相変わらず宿題は見せろとうるさいし

授業中寝てるし

中身はいつまでも成長しないな・・・なんて思ってたのに

ある日の昼休み。

人目を避けるように廊下を歩いて行く雄輔。

ちょっと照れたような雄輔に

なぜかこっそりついて行こうという気になった。

誰もいない野球部の部室に入った雄輔。

「あ、雄輔くん、来てくれたんだ」

「ああ。何か用か？」

「……そんなこと聞く？いまさら。」

「だよな……」

3年のマネージャーじゃない……

しかも、イケナイことしてるとかいう

ちよつと良くない噂のある……

重なる二人の影をちらっと見た瞬間

足音を立てないように

あたしは引き返した。

足が震える。

ドキドキが止まらない。

アイツ・・・・・・・・

何やってんのよ!!!

勝手に一人成長してる・・・

信じられない・・・

胸の奥が痛くて、ご飯がのどを通らない。

友達のほなみが、あたしの異変に最初に気付いた。

「何かあったの？顔、青いよ？」

あたしは何も答えられず

力なく自分の席に座った。

別に雄輔が誰と付き合っても

それはあたしがどうこう言えた義理じゃない。

彼女でも何でもなし。

そう、雄輔の中ではただの幼馴染。

便利な宿題仕上げマシンなのかもしれない。

そして……

女としてあんな人が

雄輔の傍にいるなんて……

まだ誰にも触れられたことのない唇にそっと触れたら
じわっと涙がにじんできた。

おかげで、

なぜか鼻歌歌いながら教室に戻ってきた雄輔の顔は

あたしにははつきり見えなかった。

嬉しそうな顔なんて見たくもないけど。

？

「なあ、あかり、英語のノート見せろよ。」

雄輔の言葉に、あたしは

キッと睨みつけた。

何よ。

さっきまで先輩と・・・・・・・・

何度か悔しくって

知らんぷりを決め込んだ。

むしゃくしゃする。

何だか面白くない。

「何怒ってんの？」

雄輔がおちゃらけてあたしの顔を覗き込んだ。

一瞬周りで悲鳴のような声が聞こえた。

思わず顔をあげて雄輔と目が合う。

・
・
・
・
・
・

口惜しいけど、負けた。

整った顔立ちに。

優しいふりした眼差しに。

あたしは黙ってノートを差し出した。

「あかりのノートって、分かりやすいんだよな。

サンキュ」

そう、昨日、必死になって

綺麗に分かりやすく書きなおしたの。

雄輔のために。

テストに出そうな所は

チェックマークまで入ってる。

横からのぞき込んだ隼人が

一瞬驚いた顔になって

そしてまじまじとあたしの顔を見た。

「これ……お前……わざわざ？」

言うな。気付いても言うな！

隼人はあたしの視線を受けて

言葉を切った。

「雄輔、これでいい点取れなきゃ

バチ当たんどぞ。」

隼人の言葉に

「んなこと言っても無理！

オレの頭をなんだと思っ
てんだ！」

と、変な自慢をする雄輔。

あたしは、やるせない思いに

大きなため息をついた。

？

学校からの帰り道、

クツタクタになったあたしは

ラケットや荷物を担いでとぼとぼ歩いていた。

「あかり、最近オレに何か怒ってんのか？」

いきなり後ろから聞こえた声にビクツとする。

振り返ると野球のユニフォーム姿の雄輔がいた。

「べ・・・別に、何にも・・・」

慌てて答えた声は、ひっくり返っていた。

そんなあたしを雄輔は

面白そうに見てる。

最近の雄輔は、何だかオトコっぽくなって
カンが狂う。

今までみたいにじゃれてはいけないような
かと言って、他人行儀にも今更出来ない。

鞆を肩に引っ掛けて

雄輔はあたしの隣を歩いていた。

それがまるで当たり前みたいに。

ちょっと前までは毎日当たり前に

一緒に帰ってたのに

なんか妙にドキドキする。

余計不機嫌な顔になったあたしに

雄輔はいきなり、ほっぺを

プニ~~~~っつて引っ張ってきた。

「もう！何すんのよぉ！」

思わず振り上げた手を

軽く捕まえられた。

「お前にぶたれるほど

トロ臭くねーって」

あたしの手を掴んだまま

雄輔はニッコリ笑った。

あたしは真っ赤な顔して

雄輔に掴まれた手を振り払う。

腹立っけどなんだか嬉しくて

だけど照れくさくて・・・

なんだか不思議な甘い気分だった。

そんなあたし達をちよつと離れた後ろから

たくさんの方が見ていたことを知るの

翌日のことだった。

？

ある日、あたしの上履きが消えていた。

よくある嫌がらせだけど、

その原因があたしには思い当たらない。

周りを探すと、

下駄箱の近くの植え込みの中に

放り込まれていた。

「誰よ・・・こんなことすんの・・・」

ため息をつきながら

土を払って上履きを履いた。

教室に入ると、あたしの机は少しゆがんで置いてあった。

「誰かぶつかったのかな？」

そうじゃないことを感じつつも

誰にともなくつぶやいた。

そうであって欲しかったし。

休み時間、あたしはトイレへと急いでいた。

教室移動のために

ちよつと時間が迫っていて

忙しかったから・・・。

そんなときに限って厄介なことに巻き込まれた。

「ちよつと、調子に乗ってんのってあんた？」

「？あたしじゃないです。」

「よく言うよ！コイツだって！」

何のこと？

何であたしは、からまれてんの？

「雄輔に付きまといっでんじゃないよ。」

ブラウスの襟首を掴まれる。

「雄輔は香織の彼氏なんだかね！」

「ちょっとお。まだそんなんじゃないって。」

香織というのはこの人か・・・

ちらっと見たその人は・・・

いつぞやのマナージャー……

そういう事……なのね？

照れながらも、あたしを睨んで言った。

「でも、あんたに手出しはされたくないんだよ。
分かってる？」

意味分かんない。

あたしがいつ雄輔に手を出した？

「分かったら雄輔には手を出すなよ。」

乱暴に突き放されて

ブラウスのボタンが一つ取れた。

転がったボタンを黙って拾う。

あたしが一体何したって言うの？

ムカムカつとして、あたしは半ば切れた。

「あたしは別に雄輔に手なんか出してません！
変な言いがかり付けないでください。」

一応先輩らしいので敬語。

でも、睨みつけながら思いつきり不機嫌。

バチン！！！！

盛大な音が響いて、数秒後に

頬に痛みを感じた。

「生意気！いい加減にしたら？」

捨て台詞を残して

チャイムと共に消えて言った先輩たち。

口惜しくてこぼれそうになる涙をギュっとこらえて

遅刻して教室を移動した。

「こら！何でおくれ・・・」

と言いかけた先生が思わず口をつぐむ。

「遅れてすみませんでした。」

一言言っただけは自分の席へ。

クラスのみんながあたしの顔を見つめる中、

何とか涙をこぼさずに

席に着くと、何事もなかったかのように

あたしはノートを取り始めた。

？

授業が終わるのを待ちかねたように

ほなみがやってきた。

「何かあったんでしょ？どうした？」

「・・・・・・・・」

心配そうな顔されて何も言わないのも

ものすごく気が引けるけど

今口を開くと、涙も出てきそうだから・・・

と、その時、雄輔が

「これ持って帰つていてくれ。」

と、ほなみにあたしの荷物を持たせると

「来い！」

って、手首を掴まれて引っ張られた。

ほなみは、雄輔に手渡されたあたしのノートと

あたし達を見比べながらも

なんだか嬉しそうな顔してる。

「やめてよ。」

あたしの抗議もむなしく

雄輔は足を動かすスピードを緩めない。

そのままあたしは誰も来ない

階段の踊り場に連れてこられた。

「誰に絡まれた？」

「からまれたとか言っていないけど？」

いきなりのストライクな発言に

どきまぎしながら答えると

「それ以外にお前が、んな顔するわけねー。」

って、きっぱり言い切った。

「ちょっとくらいのことなら

あかりのくせに、へこたれたりすつかよ。」

バカにすんなど言わんばかりの雄輔の言い草に

ちよっと笑ってしまう。

でも、言えないよ。

相手はあんたの先輩だなんて。

この前あんな嬉しそうな顔して

二人で会ってたんでしょ……

あたしは無理に笑顔を作ると

「雄輔には教えてやんな……い」

って、ふざけて逃げようとした。

そうでもしないと完璧泣くから。

なのに……あのバカ……

「オレにも言えねーって？」

って呟くと、いきなりあたしをその腕に閉じ込めてきた。

一瞬体が硬直した。

怖い？

イヤ違う・・・

びっくり・・・？

ちょっとそうかも。

でも一番の原因は、雄輔だったから。

あたしの恋心に拍車かけてどうすんのよ・・・

ったく・・・

？

どうしていいものやら、

こういう経験はあまりないもんで戸惑ったけど

雄輔の胸を大きく突き放して

「雄輔のせいだかね！」

って、一言捨て台詞のように残すと

あたしは教室へ走っていった。

「オレのせい？」

ポツンと残された雄輔が

意味分かんねーって顔して立っている。

「オレがなんかしたあ？」

いくら考えても思い当たる節がねえし・・・

しょうがねーな・・・

見張るか・・・

* : . .
 : '。 * : . .
 O . : : '。
 O . : . .
 * : . .
 O . : . .
 O . : . .
 . .

「あかりい」

王子様に連れ去られたお姫様みたい」

教室に帰ると

あたしの重々しい気分とは裏腹に

これ以上ないくらいのテンションのみんながいた。

そりゃそうか・・・

泣きそうな顔してたあたしを

有無を言わせず連れ去った雄輔。

嫌でも噂になるよね・・・

「で、どうだったの？」

「何言われた？」

「慰めてもらったりした？」

「ぎゅーっとかされたの？」

きゃあ~~~~っ という雄たけび。

あんたたち、絶対心配してないだろ。

楽しんでんじゃん・・・

？

人の噂なんて、あたしは大っきらいだあ！！！！

あっという間に雄輔との噂は広まって

その内容も、

『授業が終わって、雄輔くんにあかりが連れてかれたらしいよ。』

『へー、どこ行っただろうね・・・』

『授業が終わってから雄輔くんとあかりがどっか行っただらしい。』

『えー！二人で？マジ？』

『授業が終わるとすぐに二人で消えたらしいよ。』

『どっちが誘ったの？』

『しらない。でも、雄輔くんが誘ったりする?』

『じゃ、あかり?』

『授業が終わった途端、

あかりが雄輔くんをどつか連れていったらしい。』

なんていう伝言ゲーム。

あのね……

事実はもちろん確認しようよ……

あたしの心配なんて、あっけなく実現すんのよね。

テニス部の練習を終えて

ボールを片付けていたら、

いきなり横から先輩たちがバラバラと現れて
ぐるりと囲まれた。

あ．．．休み時間の先輩たち．．．

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」

にこやかな顔で

なぜか狭い野球部の部室に連れ込まれてしまう。

笑顔が逆に怖いです．．．。

「雄輔に手出しはしないでって言ったわよね？」

グイッと一歩近寄られて、思わず後ずさり。

「どづいづつもり？」

「こんなこと言われてもですね・・・」

「それは俺のセリフだな。」

思わず振り返る。

部室の入口には、夕陽をバックに雄輔が立っていた。

？

「何でオレのせいかと思えば・・・

だったら、さっさとそう言え！

ほら、帰んぞ。」

つかつかつと部屋に入ってくるなり

雄輔はまた、あたしの手を掴んで

外へ引つ張り出した。

「雄輔くん！」

マネージャーが、あたしの腕を捕まえて

睨みつけながら言った。

「あんだ、あたしのこと好きだって言っただじゃん！」

え？そんなこと言ったの？

「ああ、言ったよ。」

オレ、仲間やダチはみんな好きだぜ。

ただなあ……」

雄輔は言葉を切って

マネージャーとその周りの女の子たちを見回して行った。

「あかりはちつこい時からの大事な友達だ。

オレの大事なヤツを傷つけるヤツは

誰であってもぜってーゆるさねー。

今度こんな真似したら、

女だからって容赦しねーし。」

背中が冷たくなるようなまなざしを向け、

彼女たちを睨む雄輔。

力なくあたしの腕を離れたマネージャー！。

雄輔は振り返りもせず

あたしの片付けを手伝い、

「ワリい。ほんとにオレのせいだったな。」

って、ぼそつと謝った。

.....

「でも、こんな時はさっさと言えよ。

まどろっこしいことしなくても

ちゃんと助けてやつから。」

「別に助けてもらわなくったって

大丈夫だもん。」

可愛くない返事をしたあたしに

雄輔が正面で立ち止まる。

そして、あたしの頬にそつと手を当てた。

いきなりな行動に心臓は暴走気味。

「こんな風に二度と傷つけられたりすんな。

バカ。
」

そう言ってニッコリ笑った雄輔の眼は

いつものように優しくかった。

？
（前書き）

ちよつと実験です。

アメブロからお越しの皆様、
ありがとう

？

雄輔の笑顔は小さい時から見慣れてるけど
今日のはマズイ・・・

家に帰っても勉強どころか

何にも頭に入って来やしない・・・

それどころか、

気付けば雄輔のことを考えてるあたしがいて

ぼんやりすることが増えた。

そして、今日は朝からなんだかおかしい。

まず、教科書がない。

あれ？忘れてきたっけ・・・？

筆箱の中に消しゴムもない。

・・・？

だめだ・・・重症？

こんなことじゃあたしダメ！

頑張んなさいよ！あたし！

と叱咤激励しつつも、

あれ？

今度はノリもない・・・

体育の授業中、

少し気分が悪くなってきた。

あ・・・もしかして・・・？

そろそろ予定の日だけ・・・

体育の先生に気分が悪いことを伝え、

保健室に行かせてもらった。

そのついでに教室に寄って

鞆の中からアレ、取ってこよう・・・

中途半端な時間に誰もいない教室に戻るのって

初めて・・・

ガラッと、ドアを開けたら

誰もいないはずの教室に

しかもここは1年の教室なのに

3年生がいる。

野球部のマネージャーさん・・・

おまけにあたしの席にいる・・・

その手にはあたしの筆箱があり、

お気に入りのシャープペンが握られていた。

その瞬間、あたしは悟った。

朝から、ボーーーーーっとしてたせいじゃなく

教科書も、消しゴムも、ノリも

次はシャープペンまで消えそうになっていた理由を。

「サイテー・・・」

そんなことして恥ずかしくないんですか？」

ムカムカがひどくなってきた。

「あんたが悪いのよ。」

せつかく仲良くなれたのに・・・」

うなだれるマネージャー！。

「卑怯者って、雄輔が一番嫌いなヤツですよ。」

あたしは保健室に行きますから

ちゃんと返してくださいね。他の物も。」

そう言って教室を出る。

「雄輔に言うの?」

泣きそうな声が聞こえた。

「言われて困るようなことは

やめた方がいいと思います。」

それだけ答えると

あたしは、教室を後にした。

？

それからしばらくは何事もなく

平穩に過ぎ去っていった。

あたし達は相変わらず、

中学生生活を満喫していたけど

2年生になったところから

進路が気になり始めた。

こう言っちゃなんだけど

あたし、学年トップクラス。

進学先は地元の進学校と決めている。

でも・・・

雄輔は、野球に明け暮れ

友達と遊びまくり

最近はというと、生徒指導の先生に
お世話になることも多くなってきた。

「こら！雄輔！お前またそのズボン！」

「うつせーな。このくらいいいだろ！」

「ちよつと職員室に來い！」

そうして渋谷職員室へとついて行く雄輔。

授業時間も寝てることが多くなってきた。

野球部は毎朝朝練を欠かさない。

7時には雄輔もグラウンドを走っていた。

そりゃくたびれもするか・・・

そんな雄輔の分もノートを取るのが

最近のあたしの日課になった。

こんな生活ももうすぐ終わっちゃうのかな・・・

いつも一緒にいた雄輔が

同じ学校にいないというのは

頭で理解してみてもきつと寂しいだろうと思う。

はあ・・・

このままでいられたらいいのにな・・・

「まったく・・・高橋のヤツしつこいんだよ・・・」

規定通りのズボンに履き替えて

教室に戻ってきた雄輔は

生徒指導の先生にこってり絞られたみたい。

そりゃ仕方ないね。

最近の雄輔はちょっと近寄りがたい雰囲気を出している。

相変わらずカッコいいと噂にはなるけど

正直怖くて告げない・・・と、もっぱらの噂。

あたしといるときは

小学生のころと何ら変わらないんだけどね・・・

「雄輔、ほれ、今日のノート。」

「サンキュ」

「ちゃんと勉強しなよ。」

「なんで？オレ、勉強嫌いだし。」

・・・

あたしは知っている。

雄輔、ちゃんとやれば数学なんて

あたしより出来るようになることを。

本人の自覚はないけど。

なのに・・・悲しいなあ・・・

高校だって雄輔と一緒に通えたら嬉しいと思ってるのは

あたしだけみたい・・・

「じゃ、もう、ノート見せない。」

「どうして？」

その問いに答えずにあたしは教室を出て行った。

？

「あかり〜い　なあ　おい！」

あたしの周りをうるちよろしては

さつきから目を合わそうとする雄輔。

ノート貸さない宣言をしてから

雄輔はほんとにあたしからノートをもらえなくなって

しかも、

あたしの全知能と甘い想いをこめて作った

雄輔仕様のノートだった為に

とーっても分かりやすくて

他の子のノートでは、

もはや物足りなくなっただけらしい。

あつたりまえじゃん。

あかりさんをなめんじやないわよ

そんなに簡単に落ちてたまるか。

あたしが一旦貸さないと言ったら

そう簡単に貸すわけないでしょ

なぜあたしがこんなにルンルンかと言えば・・・

実は、野球部にはある掟が存在した。

学力が前回のテストよりも

トータル30点以上落とすことがあれば

どうあがいてもレギュラー入りは出来ない。
と。

今まであたしのノートで

点数を稼いできた雄輔にとって

まさに死活問題。

レギュラー取れないなんてアイツにとっちゃ

屈辱以外の何物でもない。

そして……

雄輔が、そんなことは死んでも認められないってことを

あたしはよーく知っている。

間もなくテスト1週間前というこの時期に

あたしのノートがないとどうにもならないと

切羽詰まっていた。

「だったら授業中起きて授業聞いてればいいじゃん。」

「んなこと無理ィ」

「いい加減機嫌直して貸せってば。」

あたし達の話聞いていた一人の女の子が

「雄輔くん、あたしが貸してあげるよ

あかりのじゃなくてもいいでしょ？ほら。」

ほっぺをピンクに染めて

一大決心をして話しかけたんだろう。

なのに、雄輔の言葉でその顔は一気に青ざめた。

「余計なことすんじゃねーよ。」

オレはあかりに言ってるの！

つつーか、あかりのじゃねーと役にたたねーんだよ！」

「そんな言い方しなくても・・・」

中身は同じでしょうが！」

青い顔しながらも精一杯の言葉を返す。

でもね・・・残念ながら同じじゃないんだな・・・

「おんなじじゃねーよな。あかり。」

ニヤツと笑った雄輔。

もちろんです。

「何が違うのよ！」

あたしの方が字も綺麗なのに！」

・・・悪かったわね・・・

「ン~~~~」

強いていえば愛情？」

思わず噴き出しそうになったわよ。

雄輔のアホ！

ほら・・・みんな大騒ぎしてんじゃないの・・・

はあ。

？

みんなの騒ぎようを見て動揺したあたしに

雄輔はニヤツと笑ってダメ押し・・・

「んじゃ、今日はお前んちにノートもらいに行くからな。

あ・・・くれるまであかりの部屋に居座ろっかなあ」

あーあ・・・

みんなを無意味に刺激してどうすんだ？

雄輔・・・

冷静にその場を見ていたあたしの心とは裏腹に

顔はどんどん赤くなっていった。

もうその辺にしとかないと・・・

「何あの二人……」

こんなとこでいちやいちゃしてんじゃねーよなあ。」

聞えよがしの誰かの言葉に

雄輔のふざけてた顔が一変した。

「誰だ？今の。」

さっきまでのおちやらけ雄輔はどこへやら

目つきの鋭くなった雄輔が

若干低い声で言った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「誰が言っただって聞いてんだよ！」

がしゃんと大きな音を立てて

雄輔が机を蹴つ飛ばした。

し　　んと、妙な空気が流れた。

「ほら、授業始まるぞ〜。

みんな席につけよ。」

ドアをガラツとあけて先生ののん気な声が聞こえた。
みんな慌てて席に着く。

「ほら、雄輔も。さっさと座わんの。」

小さい声であたしが促すと

雄輔はふてくされた顔して席に着いた。

「んじゃ〜、48ページ開けて。」

空気の読めない先生でよかった

多分雄輔を除くほぼ全員がそう思って

おとなしく教科書を開く。

．．．．．これ以上は

みんなに迷惑掛かりそうだな．．

って、あたしのせい？

なんだか腑に落ちないけど

今日は、ちゃんと雄輔に話してみよう。

一緒に高校行こうって。

ちよっぴり照れながら

そんなこと考えてるあたしの横で

相変わらず雄輔は目を閉じ眠っていた。

いや、眠ってるふりをしていた。

？

「やっぱりあかりのノートはサイコーだ」

「ここはあたしの部屋。」

「雄ちゃん、久しぶりね。」

「ゆっくりしてってね。」

「お母さんの歓迎ムードに」

「はい　じゃ、遠慮なく。」

「と、ちゃっかり乗ってる雄輔。」

「ちょっとは遠慮しなさいよ。」

「まあまあ、おばさんもああ言ってることだし」

あたしの方見向きもせずに

必死でノート読んでる雄輔。

「取り合えず現状維持が目標だかな。

時間もねーし。

マジで助かった……」

ちらつと目をあげて

心底嬉しそうに笑う雄輔。

この笑顔に負けたあたし。

でも、言いたいことはちゃんとっておこづ。

「雄輔、ノートはちゃんと見せてあげる。」

ただし、約束守ってくれたら。」

「オッケー。あかりとの約束なら

なんだって守ってやつから。」

余裕な顔して言った雄輔。

ふーん、言ったわね。

「男がやつは無理、とか言わないでよね。」

「あたりめーだろ。」

「じゃ、同じ高校に入ってね。」

「はあ？」

一瞬雄輔の顔が固まった。

「無理とか言わないでよね。約束だかね。」

・・・・・・・・

顔に無理と書いてある。

でもそれを言わせるわけにはいかない。

「あたしは雄輔と同じ高校に行きたいの。」

でも、雄輔にレベルは合わせないから」

あたしの言葉に雄輔が固まりつつ

じーっとなあたしの顔を見つめる。

あたしも目をそらさない。

ここでは負けるわけにいかないっしょ。

結構苦痛な時間。

ドキドキしてきたじゃない……

と、その時、雄輔の視線がふつと下にそれた。

ため息とともに

「しゃーねーなあ……」

お前、オレの成績知ってて言ってるのかよ……」

と、声が聞こえた。

それっきり雄輔は何も言わず

ノートを見つめていた。

そしてそんな雄輔を

あたしもなにも言わずに見つめていた。

？

授業中、雄輔が起きていた。

周りのみんなは今までにない事態に

興味津々。

時々雄輔に睨まれて慌てて目をそらす。

「雄輔くん、起きてるなんて雪でも降るんじゃない？」

「んなわけないでしょ。今夏だし。」

友達の言葉にも冷静に返すあたし。

でも、その理由はあたしと雄輔だけが知っている。

あの後、固まっている雄輔に

「ちゃんと約束守ってよね。」

って念押ししたら、

「くどい！オレが約束破るわけねーだろ！」

って、変に開き直られた。

「だからって、オレたち、友達だろ？」

協力はしてくれんだろーなあ？」

ニヤツと笑った雄輔から持ち出された交換条件。

時間のある限り勉強に付き合うこと。

こう言っちゃなんだけど

密かにもものすごく嬉しかったりする。

で、かつたるそうな格好してはいるけど

一応授業は聞いている。

聞いてるどころか、ちゃんと理解してる。

頭の回転は速いのよね。雄輔。

「最近雄輔くん、何か変わったよね。」

「ほんと。真面目な顔してること増えたよね。」

目がハートマークの女の子たちが

嬉しそうに話しながら部活の片付けをしていた。

もう暗くなり始めた。

今日はなんだかんだで遅くなっちゃったな・・・

「あかり、おせーよ。」

噂の主がいきなり現れて

会話中の女の子たちは一気に盛り上がる。

でも、雄輔の言葉を聞いた途端、
一斉にあたしに視線が集まった。

「ごめん。」

最近何事にもめげなくなったあたしは
それだけ言つと雄輔の隣を歩く。

何気なくいつも車道側を歩く雄輔。
そついうところもキユンとする。

あれから雄輔とあたしは毎日
どちらかのうちに寄つてから
自分ちに帰るようになった。

約2時間の二人での勉強が日課になると
あたし達の親は真面目に勉強してるのを

応援してくれるようになった。

いつしか、周りのやつかんだ

視線なんて気にならないほど

あたしは強くなった。

そして、いつか、雄輔の隣はあたしと

誰もが認識するようになった。

そして・・・

雄輔の成績はあっという間に

周りのみんなが驚くくらいよくなった。

「ほら見る！オレって出来る子だろ？」

嬉しそうにテストの結果を見せる雄輔。

「まあまあね。教える人がいいから」

なんておどけてみるけど

ほんとに合格圏内に入る勢いで成績は上がっている。

本当に嬉しかった。

3年生になるまではすべてが順調で。

毎日が幸せだった。

なのに・・・・・・・・・・

幸せが壊れるのって

ほんと一瞬の出来事だと

あたしはその時まだ

ちつとも知らなかった。

？

それはちょっとした出来心からだった。

「ふぁ~~~~眠い・・・」

ぱたつと倒れるようにしてひっくり返った雄輔。

ここは雄輔の部屋。

いつものようにあたし達は

部活のハードな練習を終えたのち

こうやって勉強していた。

宿題をやっていた雄輔は

大きなあくびと共に

「10分だけ寝かせて・・・zzz」

って、速攻寝てしまう。

無理もない。

朝から目いっぱい運動場を走り回っていたもん。

あたしは、雄輔の寝顔をじっと見つめた。

小さい頃から見慣れた顔だけど

やっぱりカッコいいなあ・・・

・・・

一瞬魔がさした。

大の字になっている雄輔の傍に

そつと寝転がってみた。

やん 一緒に寝てるみたい

なんて一人くすつと笑ってしまう。

横から眺める景色ってまた違うのよね。

ちょっとしたいたずら気分も満足し

時計を見て雄輔に声をかける。

「雄輔・・・そろそろ起きない？

10分たったよ。」

腕を突っついてみたけど反応なし。

ボールを投げている腕は

同級生より筋肉もついて逞しい。

ちよつとだけ腕枕

なんて腕に頭を乗つけてみたら・・・

「んん・・・」

つて雄輔が寝返りを打った。

あたしの方に。

あたしは抱き枕のようになりしっかり抱えられて

幸せそうな雄輔の寝顔を見る羽目になった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

おい・・・・・・

これはちょっと・・・・・・

まずいんじゃないの・・・？

ドキドキと照れくささと嬉しさの入り混じった

妙な感覚。

ああ・・・あたしはやっぱ雄輔が好き

？

ドキドキしながら現在の状況に

ちよっぴりときめいていた時、

とんとんとん・・・と、

階段が上がってくる足音が聞こえた。

勉強始めて1時間くらいすると

いつもお母さんたちはお茶とお菓子を出してくれた。

今日もその時間だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！

「雄輔！ちよつと雄輔ってば！」

「・・・・・・・・・・うつせーよ・・・zzz」

起きない・・・

っていうより、早くここから抜け出さないと！！！！

もがくあたしを雄輔は逃がしてくれない。

無意識に抱き枕にしてる・・・

「頑張ってる？はい、お茶持って来たわ…よ。」

雄輔のお母さんが一瞬固まり、

そして、はっと我に返ってお盆を側に置くと

「雄輔！！！！！！」

って、ばしっつっつと頭に一発張り手が飛んだ。

「いつてえ……」

と、さすがに目を覚ました雄輔が

何すんだよとすごむ前に

あたしが腕の中でもがいているのと

お母さんが目の前で仁王立ちして

げんこつ握りしめて爆発寸前なのを見ると

一瞬で青ざめた。

「あ……えつと、これはオカン、違うんだ、

オレはなんも……」

慌てて雄輔はあたしから腕を離す。

「雄輔、ちょっとおいで！」

と、雄輔を引きずるように連れていくお母さん。

そして、あたしを振り返ると

精いっぱい笑顔の顔を浮かべて

「ごめんねあかりちゃん、

このバカがひどいことして。

悪いけど今日は帰ってくれる？」

と、あたしの返事も聞かずに

おばさんは雄輔を引っ張って行った。

「オレは別になんも・・・」

弁解をしようとする雄輔を

「黙ってなさい！」

と、一喝しながら。

あたしは……

何も言えず、とぼとぼとすぐ近くの自宅へと戻った。

「早かったのね……」

と、何も知らないお母さんに言われ

胸の奥になんとも言えない痛みを抱えながら

あたしは自分の部屋に入った。

……

あたしのせいだ……

あたしがちゃんと勉強してれば

こんなことにはならなかったのに……

きつと今頃、雄輔はこってり絞られてんだろうな

あたしのせいで・・・

？

「うわぁ！雄輔、誰にやられたんだよ！

俺らの知ってるヤツか？どこの中学のヤツ？」

教室へ入ってくるなり

雄輔は友達に驚きの声をかけられていた。

あたしも思わず2度見したわよ。

だって……

「うつせー。お前らにはカンケーね。

転んだだけだ。」

……

明らかに誰もがウソと分かる言い訳。

雄輔の顔は口の横が青く腫れ、

頬も赤く腫れていた。

あたしは思わずうつむいて唇をかみしめた。

あーあ、おじさんもおばさんも

雄輔が無理矢理・・・って思ってるんだ・・・

確かに、あたし、逃げようとして暴れてたしな・・・

素行の悪かった雄輔は

現場を押さえられどうしようもなかったんだろう。

それに本人無意識だから

説明のしようもなかったはず。

あーあ……やっぱりあたしのせい。

その日、雄輔に

「あかり……ちよつといいか。」

って、お昼休み呼び出された。

誰もいない校舎の裏で、

「オレ、昨日のこと何も覚えてねーんだけど

お前にひどいことしたのか？」

って聞かれた。

「うつん。」

雄輔、ごめんね……。痛かったよね……」

こみあげてきそうになる涙を抑えて

あたしは謝った。

「んなことあ、どうでもいいけどよ、

何であんな風になってたか、

さっぱり分かんねーし。

やっぱりオレのせい？」

「それは……………」

あたしは言葉が見つからなかった。

雄輔は確かに寝ぼけていたんだろう。

でも・・・・・・・・

確かにあたしが悪かった。

なのにあたしには言えなかった。

雄輔がなぜあたしを抱き枕にしてたのか。

雄輔に添い寝してみたかったなんて

多分口が裂けても

あたしには言えっこない……

ゴメン、雄輔……

？

「ほなみ、一緒に帰ろ。」

部活の後、あたしは最近ほなみと帰る。

あの日以来

雄輔はぱったりあたしにかまわなくなつた。

つていうか……

「オトンに、あかりの２メートル以内に入るなつて

思いっきりくぎ刺されてさ……」

雄輔、あんたそれ言いながらあたしとの距離

１メートルもないけど……

「別に手出しするわけじゃねーのになあ。

……って、あれは出したことになんのか？」

ばやきながらため息つく雄輔。

「え？雄輔、あかりに手え出したの？

マジーーーー？」

隼人が話に割り込んできた。

「お前にはカンケーねーから。」

ヘッドロックを決める雄輔。

で、隼人のギブアップも何気なくスルーしながら

「無事高校生になったら文句ねーだろ。

ま、それまでオレ、頑張ってみっから。」

最上級の笑顔を見せて

そんなことをいう雄輔に

思わず笑ってしまった。

「じゃ、高校合格したら

この前の真相を話すことにするわ。」

って、あたしもニッコリ。

その言葉に雄輔は固まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それって今じゃダメな理由でもあんのか？」

じつと顔を見つめてあたしの答えを待つ雄輔に

あたしはどうしても答えることはできなかった。

雄輔が大好きだから

雄輔にくつつきたかったなんて

そんなこつぱずかしいこと

公衆の面前で（誰もいなくても）

言えるわけありませんって……

それに……

今だって仲良くしてる友達なのに

改めて付き合ってくださいとかいうわけ？

んなこと言われちゃ雄輔だって困るだろう。

「多分雄輔が困るから言えない。」

「……………」

雄輔は渋々納得はしてくれたけど

困るのは雄輔じゃなくて

ほんとはあたしだったみたい。

時が過ぎるのは早い。

受験生となつてから、人目につかないように

勉強始めた雄輔は

3学期にはあたしと同じ高校へと願書を出していた。

やれば出来んだよ！

そう言っていた雄輔。

そんな雄輔がまぶしくて

雄輔が頑張ってるから

あたしも頑張ろうって・・・

そう思つてこの一年頑張ってきた。

「卒業式の日、ボタンもらうんだ」

何人かの子が嬉しそうに話しているのを聞くと

あたしも雄輔に……っと思う。

きつと嫌って言わないよね……

「雄輔くん、ちょっと!」

間もなく卒業というある日

隣のクラスから雄輔に呼び出しがかかった。

呼んだ子は、友達を後ろに連れている。

「ほらあ、呼んだげたわよ。」

「え、でも……」

「でもないって。じゃ、頑張つてね。」

渡り廊下で雄輔は隣のクラスの子と

二人で向かい合っている。

「何か用？」

「あの……これ……読んでください！」

真っ赤な顔して雄輔に一通の手紙を押しつける。

そのまま帰されるのを恐れるかのように

全速力で逃げていった。

残された雄輔は、小さく息を吐くとくすつと笑って教室に戻って来た。

「ラブレターもらったの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・知らん。」

「読まないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄輔はそのままくしゃっとポケットに突っ込んで

何もなかったかのように友達としゃべり始めた。

雄輔は明らかにさっきの手紙を意識している。

それなのにここで開けることも出来ず

そわそわしている。

あたし・・・・・・・・もしかして

遅れを取っているんじゃないだろうか・・・

ふとそんなことを思った。

ず　　っと好きだったけど

一度も好きだと言ったことはない。

もしかして、雄輔に彼女が出来たら・・・

なんて考えると背中に寒気が走った。

そして、数日後に雄輔がその子と肩を並べて

下校しているのを見ると

まるで、

ナイフを差し込まれたように胸の奥が痛んだ。

残り少ない中学生生活。

まさかこんな結末を迎えるなんて・・・

雄輔は、

よく隣の組の女の子と一緒にいるようになった。

受験まで後わずか。

こんなところで勉強が手につかなくなるなんて

どうすんのよあたし・・・

授業はもうすべて終わって

毎日復習のみ。

あたしのノートが雄輔に必要とされることもなくなった。

あせる。

あたし達が培ってきた友情は

どこへ消えさった？

恋のかけらもなかったの？

あの時の抱きしめられた感触は

いつまでも忘れられないで

あたしの体に残っているのに？

ふと気を抜くとそんなことばかりが

頭の中を回ってる。

帰りがけ、席から立ち上がろうとして
クラツと立ちくらみに襲われた。

「あかり、顔色悪いよ？」

ほなみに言われて、苦笑する。

そりゃそうだろう。

昨日だってほとんど寝てないし。

勉強してたわけじゃなく

そりゃちょっとくらいしてたけど

気になることがあると眠れなくなる。

「そう？ははは・・・」

乾いた笑いを他人の声のように聞きながら

あたしは机に突っ伏した。

あーしんど・・・。

「調子ワリいのか？無理してんじゃねーの？」

そう言いながら

雄輔があたしの鞆と自分の鞆を重ねて持つと

「立てるか？帰んぞ。」

って、腕を掴んだ。

「別に大丈夫だから。」

と言いつつ、嬉しさを隠せないあたし。

最近ほとんどしゃべらなかつたくせに・・・

と思いながらも頬が緩む。

背中に冷やかしの声を聞きながらも

笑顔がこぼれて隠せなかった。

教室を一步出ると、

「雄輔くん・・・」

と、聞き慣れない声がした。

呼びとめられたその声に

あたしもつい振り向いた。

あ・・・隣の組の・・・

「あ、今日はコイツと帰るわ。

ゴメンな。」

雄輔はそれだけ言つとまた前を向いて

歩き始めた。

あたしの背中には彼女の痛い視線が

ずっと突き刺さっていた。

「雄輔、あの子と付き合つてんの・・・?」

思い切つて聞いてみる。

「え・・・?」

一瞬びっくりした顔して

すぐにニヤツと笑うと

「妬ける？」

と聞いてきた。

ということは肯定？

「じゃ、あたしはもういいから鞆、返して。」

と、手を出した。

「やだね。倒れて怪我でもされちゃ

夢見ワリいだろ。」

吐き気までしてきた。

雄輔はあの子と付き合ってるんだ・・・

だからあの子、

ああやってあたしを睨んで・・・

「睨まれるよりましよ！」

それ以上は何も言えなかった。

口惜しいけどあたしが遅かったんだね。

涙があふれてきて

慌ててハンドタオルで顔を抑えると

いきなり廊下を駆け抜け

階段を走り降り

下駄箱でスリッパを脱ぎ

靴を履き換えようとした所で

雄輔に手をぎゅっとつかまれた。

そこであたしの逃走は終わりだった。

あたしは嗚咽を抑えきれずに

泣き崩れた。

当然のことながら注目を集めるあたし達。

「おい！何やってる！」

先生が噂を聞きつけてやってきた。

泣き崩れてるあたしも

ちよつと冷静になつてくる。

「雄輔！お前また何しでかした！」

先生の怒声に

「何もしてねーよ！」

と、むくれながら答える雄輔。

「大丈夫か？雄輔に何されたんだ？」

あたしを覗き込むようにして

尋ねる先生。

「だから何もしてねーつつてんだろ！」

「お前は黙ってる！」

・・・・・・・・

泣いてる場合ではない・・・・・・・・

ややこしくなったら、うつとおしいし・・・

「雄輔が・・・・・・・・」

泣きじゃくりながらも答える。

「ん？どうしたって？」

「助けてくれました。」

「はあ？」

先生、悪いけど期待外れです。

問題児の雄輔だけだね。

「気をつけて帰れよ。」

「オレがちゃんと連れて帰る。」

「それが心配なんだよ。」

「うっせー。ほら、行くぞ。」

いつの間にかあちこちに人だかりができ

じっとこつちを注目してる。

その中を雄輔はためらいもせず

右手に鞆2個と

左手にあたしの手を掴んで

校門を出た。

バカたれ・・・

どんだけ好きにさせんのよ。

手を引っ張られて歩きながら

あたしは胸の中でそつと呟いた。

「あかり……何か怒ってんのか？」

帰りながら雄輔が言った。

「んなことない。」

怒ってると言えば怒ってるかもしれないけど。

「んじゃ、俺ら、友達だよな。」

何かみずくさい事言っくなよな。」

………

友達………か。

そうか・・・そうだよね。

あたしが雄輔のこと友達を思えないだけで

雄輔の中ではあたしはオトモダチ・・・

「で、なんで泣いたんだ？

何かあつたんだろ？」

オトモダチのあんたに言えるような理由じゃない。

「オレさあ、あかりのこと好きだし、

これから今までみたいに

ノート見せてもらったり

バカなこと言いあいしたりしてーから

お前の言う通り勉強も頑張ったしさ、

良い友達だろ？オレ」

ほんっつとにバカ・・・・・・・・・・！！

あんただけだよ、そんな風に思ってたのは。

「オレ高校行ったら、部活楽しみにしてんだ

部活引退してから体がウズウズしてさあ。

早く4月になんねーかなあ」

4月・・・・かあ。

隣を歩く雄輔をそっと思上げる。

「高校、一緒に行けたらいいなあ。」

ボソツとつぶやくと

「ああそうだな。」

そう言って雄輔もあたしを見た。

高校に一緒に行けたら……

こんな日がもう少し続くんだ……

「高校でもテニスすんのか？」

雄輔に聞かれて

「分かんない。」

と答えると

「マネージャーやんねー？」

高校って、マネージャーいるじゃん？」

って、言う。

マ．．．．．マネージャー？

あたしが？

．．．．．

それ楽しそうかも．．．

一人で高校生活に想いを馳せながら

笑顔が戻ったあたしを雄輔は

ほっとして眺めていた。

あたしは、泣いていたこともすっかり忘れ

雄輔と今までみたいに話しながら

気分がとても落ち着いてきた。

「やっと、いつものあかりに戻ったな。

じゃ、また明日な。」

いつしか家は目の前で

名残惜しく思いながらも

あたしは珍しく笑顔でただいまを言えた。

ほんと、久しぶりだな。

こんな気持ち。

もしかして雄輔欠乏症だったのかな・・・

学校の先生たちが驚くような

ラストスパートをかけて

雄輔はあたしと同じ高校に進学した。

「やるときゃ、やるんだよ」

ピースサインで嬉しそうな雄輔。

高校に入った途端、

いろいろな学校の子たちが

「ねえ！雄輔くんって彼女いるの？」

と、騒ぎ始めた。

またか・・・

あたしはどうせオトモダチだもんね・・・

直接雄輔に聞くツワモノもいて

「付き合ってる人がいなかったら是非・・・」

なんて言うこともあったらしい。

「で、雄輔はなんて？」

本人が笑いながら言うもんだから

少し顔をひきつらせて聞いてみた。

「好きなヤツがいるから付き合えない。

って言ったらあきらめるぜ。大抵。」

・・・

「誰か気になんのか？」

あたしの微妙な顔を見て雄輔は笑う。

「そりゃ・・・いや、別に・・・」

しどろもどろのあたしに雄輔はニヤツと笑って

「じゃ、部活行くか。」

と、話を変えた。

そう、あたしは自分の好きだったテニスより

雄輔の好きな野球を選んだ。

「よ、マネージャー、今日も頑張つてな！」

先輩たちに声をかけられる。

「はい！」

笑顔で答えてあたしは今日も

大きなやかんを持って冷たいお茶作りに

用務員室へと走っていった。

マナージャーの仕事は

思ってたよりずっと地味で

本当に縁の下の力持ち的な存在だった。

ちょっとした繕い物、洗濯、お茶の準備、

後片付け、部室の掃除……

みんなの練習を見てるだけじゃなくて

やることはたくさんあった。

「あ　死にそう……!!!!」

練習中に休憩の号令がかかると

一斉にお茶配り。

「うめ……!!」

ニツコリ笑顔でそういう反応されると

マネージャーとしては

「お代わりあるよ」

って、サービスしたくなる。

休憩時間はあたし達は大忙しで

終わったら片付けとお茶作り。

先輩マネージャーのみさと先輩は

笑顔の可愛い2年生。

みさと先輩と一緒にお茶を作りながら

ふーっと一つため息をついた。

「どうした？疲れた？」

ニコツと笑ってみさと先輩が聞く。

「いいえ。そんなんじゃないんですけどね。」

「ん？もしかして気になる人でもいた？

うちの野球部、粒ぞろいだから」

そうなんです。

3年の部長をはじめとして

野球部はイケメンぞろい。

ドラマのイケメンパラダイスも真っ青ってか？

目の前でそんな彼らが

必死にボールを追っかけてるのを見ると

それが雄輔じゃなくても

キウンと胸が締め付けられそうになる。

メツチャ素敵なんだもん

一番素敵なのは雄輔だけど

思わず赤くなつたあたしに

みさと先輩は明るく突っ込みを入れた。

「先輩の誰か？1年生から見ると

大人でしょ？思わずクラツと来るよね。」

「いや・・・そんなことは・・・。」

「んじゃ、え？1年なの？」

「え！あの・・・。」

慌てたあたしに、

「あかりちゃん、かわいいね！。

んじゃ、来週までに誰か観察しとくわ

あ、部長はやめた方がいいよ

彼、女癖悪いから。

性格はいいんだけどね。」

・・・

そうなの？

向井理によく似た部長に目をやる。

そういう人なんだ・・・へえ・・・

重いやかんを運びながら

運動場を眺める。

「ほら、みんな練習終わったみたいよ。

部室ドア開けてくるね！」

カギを預かっているみさと先輩は

やかんをテーブルに置くと

さっさと次の仕事に取り掛かる。

みんなの着替えが終わったところ

部長にポンと肩を叩かれた。

「あかりちゃん、どう？もう慣れた？」

いきなりな部長の出現に

ちよつとびっくり。

「あ、はい！なんとか。」

ちよつと緊張して答えるあたしに

部長は柔らかい笑みを浮かべて言った。

「疲れない程度によろしくね。」

「はい。」

あたしの返事に満足そうにうなずくと

ポンポンとあたしの頭に手を置いて

「いい返事だ。じゃ、また明日。」

と、さわやかに去っていった。

大人だぁ・・・・・・・・

今まで接したことのない大人な態度に

ちよつと放心状態のあたし。

「何ボケつとしてんの？帰んぞ。」

雄輔の声に慌てて鞆を持つ。

「待ってよぉ！」

あたしは慌てて雄輔を追いかけた。

「よっ。」

軽く手をあげて声をかけられる。

「あ、こんにちは。」

「また後でな」

「はい。」

ニツコリ笑顔で答えたあたし。

あたしは、お昼御飯のあと、

同じクラスの友達と一緒に食堂に行った。

高校生になると学校に自販機があるなんて知らなかった。

堂々とジュースが飲めるなんて

メツチャ嬉しいんだけど

ということ、今日はたまたま食堂で

自販機の前に並んでいたら

お昼を食べ終えた部長に会った。

で、さっきのご挨拶。

「きゃあ——！あかり、さっきの誰？
すごいカッコイイ——！」

「え？うちの部の部長だけど・・・？」

「ねえ、紹介してよあ——！」

まだ入り口のところにいるじゃん——！」

「……………いいけど……」

妙にハイテンションのみんなを連れて

手に持ったオレンジジュースを飲みながら

部長の背中を探す。

友達と戯れながら何か話して、

時折笑い転げてる。

・・・部活の時には見ない顔だなあ・・・

珍しいもの見ちゃった・・・

「先輩！」

あたしは部長に呼びかけた。

あたしを振り返ってニコツと笑う部長。

あれ？

後ろでみんなクラクラよろよろしてますが・・・？

大丈夫？

「どうかした？」

「いえ、友達が先輩に会いたいと・・・」

と言いかけた途端

「きゃあゝゝ 何言ってるのよあかり！！！」

と、妙なテンションの音が響く。

「良かったら、また部活の見学においでよ。」

甘い声とろけそうな笑顔で言われて

みんながいつせいに頷いた。

・・・おいおい・・・

「…………すみません…………じゃ、行くよ。」

何だかアイドルにでも会ったような反応のみんなを

そのまま教室に引っ張って戻る。

「あんなカッコいい部長っているんだね。」

みんなが口をそろえて言う。

「絶対惚れるよね…………」

うんうんと、頷くみんな。

いや…………確かにカッコいいけどね。

「部活行くのも楽しいよね…………あんな人がいたら。
うらやましそうに言われて

「ま、楽しいけどね。（あたしは別の意味で）」

と、答える。

「あかりも好きなんですよ？照れなくっていいって」

みんなが楽しそうに詰め寄る。

好奇心思いつきりむき出しにして。

「そりゃ嫌いじゃないけどね。」

「じゃ、好きなんじゃない!」

「もつと好きな人はいる。」

ぎゃああああ!!!!

という絶叫が、廊下の端まで響いた。

何事かとみんながこっちを向く。

「もう、今日はゼーったい野球部の見学に行くから!」

「で、あかりの好きな人当てようか」

「あ、それ面白そう」

「でもあたしはあの先輩がいいわあ」

そして・・・

「あかりい」

・・・ほんとに見学に来るとは思わなかったよ・・・

ギャラリーがいます、オトコって頑張る生き物らしい。

いつもにも増して真剣に練習してる。

休憩になるまで、必死でカッコいいとこ見せようと

ミスもいつもより少ない。

・・・

まあ、いいことなんだけどね。

いつものようにあたしとみさと先輩は

大きなやかんにお茶をどっさり作って

休憩中に配る。

「もしかしてあの子たち、昼休みの？」

部長が汗を拭きながら

あたしに聞いてきた。

「はい・・・すみません。」

何か申し訳なくて謝ると

「いいよ。みんな頑張ってるし。」

さわやかに笑って

「御馳走さん。」

と、コップをあたしの手にあるお盆に置いた。

目の隅にはフェンスの外で

きやあ と、小さく悶えてるみんなが見えた。

・・・・・・コップ置いただけだろーが・・・

後半の練習が始まった。

・・・・・・と、

「いてっ！！！」

ボールを追いかけて勢いよく激突する二人が見えた。

ありゃ……

雄輔と、もう一人、2年生の先輩。

「行くわよ。」

みさと先輩の声とともに

氷とタオルを持って運動場に走る。

痛そうな顔した二人に冷たい氷を渡し、

ベンチへと連れていく。

「意外と、どんくさいことするじゃん。」

あたしの肩に支えられて歩く雄輔に言ってみた。

何と初歩的なミスだろう。

人とぶつかるなんてありえないでしょ。普通。

「だよな。おかげでとんだ巻き添え食っちゃったぞ。」

2年の原田先輩が雄輔を睨んで言った。

「お前が邪魔なところにいるからだろ。」

イラッとしたように雄輔が言う。

.....

「雄輔、ちよつとこっち。」

険悪な雰囲気になりそうなので

あたしは雄輔を部室へと連れていくことにした。

ま、大したことはないと思うけど

喧嘩されちゃかなわないし。

部室で、湿布でも貼って

ちよつと心もクールダウンしなくちゃね。

「雄輔、先輩に絡むのはやめときなよ。」

湿布を貼りながらあたしが言つと

「うるせー。」

つて、そっぽ向きながら

雄輔はふてくされた顔をした。

．．．．．何かいつもの雄輔と違うなあ．．．

あたしにはこんな態度とることなかったのに．．．

「今日の練習はロードワーク。」

いきなり部長が宣言した。

うちの学校は山の中腹にあり、

坂道を上った上にある。

ちよつと・・・というかなりきついんじゃない？

「んな、無茶言つよ・・・」

ゴール前に坂道なんて死にそうじゃん。」

みんなのブーイングもものともせず

部長は言った。

「優勝者には、マネージャーと1日デート」

突然の爆弾発言に

みんながぜん張り切りだす。

「どっちと？」

興味津々のみんなの視線を浴びて

あたしとみさと先輩はため息ついた。

「前もやってたなあ・・・」

ある意味恒例なの。乗ってやってよね。」

みさと先輩に言われて

「はあ・・・」

と、力なく返事を返す。

「どっちのマネージャーがいいかは選ばせてやるっ。」

いいよな、マネージャー」

「・・・・・・・・・・オッケー」

みさと先輩の返事にみんながいつせいにスタートラインに並ぶ。

「3キロ先のお寺の門にタッチして帰って帰ること。

不正がないか、マネージャ、先に行つて来い。

赤マジック持つてな。」

「はいはい、んじゃ、あたしがチェックするからね。

みんな頑張つてね。」

と、みさと先輩は自転車で先に出発した。

あたしはゴールか・・・

しかし・・・何という練習・・・・・・・・

「位置について、用意、ドン！」

あたしの号令を合図に一斉に走り始める部員たち。

思わず心の中でつぶやいた。

「一番になって・・・雄輔。」

一斉にスタートを切った部員たちを見送り

あたしはとりあえずお茶の用意をして待つことにした。

落ち着かない……

誰が一番に帰ってくるのかな……

普通に考えりゃ、3年が早いに決まってる。

となると……

みさと先輩に聞いておけばよかった。

誰が早いのかって。

雄輔だって遅くはない。

いつもマラソン大会は入賞してた。

だから、応援してるよ……頑張れ！

5分たち

10分たち、15分が過ぎた。

運動場から通りを見降ろすと・・・

あ、帰ってきたかも？

ユニフォームが同じだから

何だか見わけが付かないけど・・・

ドキドキしながらスタートした地点に立つ。

帽子が見えてきた。

坂道を駆け上ってくるのは・・・

んん・・・とピッチャーやってる小塚先輩？

あ・・・部長も来た。

6キロ走ってきた割には二人とも

すごいスパートでトップを競っている。

雄輔は？

あっという間にゴール目指して飛び込んできた二人。

勝者は、タッチの差で小塚先輩だった。

「じゃ、約束通りマネージャー貰ってくから」

小塚先輩はニヤツと笑って部長を見た。

「しゃーねーなあ・・・。」

苦笑する部長。

「ということで、今度の土曜でどう？」

あたしの前に立ち、ニツコリ笑う小塚先輩。

「約束だからね。」

何時なら大丈夫？」

「え・・・あの・・・あたし？」

小塚先輩に戸惑いながらも問うあたし。

「そ。きみ。」

そう言うとおあたしの頭にポンポンと手を置いた。

「触んな！」

いきなり上がった声に

みんなが一瞬びっくりして目を向ける。

「今どき、そんなバカな話ねーだろ！」

なんで無理やりデートだよ。

んなもん、認めらんねー！」

小塚先輩の手をあたしの頭から払いのけ

雄輔はあたしと小塚先輩の間に立った。

「1年のくせに部長に逆らうわけ？」

ふーん。お前、何様のつもり？」

小塚先輩がバカにしたように笑う。

「おい、俊介、お前コケにされてんぞ。」

「1年がお前の言うことなんぞ聞けねーんだと。」

「雄輔、今更なに言ってるんだ？」

「カッコつけてるつもりか？」

「うつせー！」

あ・・・マズイ。雄輔、切れる3秒前・・・

先輩を殴るなんてシャレになんない。

下手したら部活どころか大変な事になるかも・・・

そう思ったあたしは大声で言った。

「小塚先輩！！！！土曜日ですね！」

じゃ、10時に駅でいいですか？」

「あかり……………」

雄輔……怒らないでよ。

んな顔して睨まれても

あたしがあんたを助ける方法って

これしか浮ばないんだもん……

口惜しそうな雄輔と対照的に

小塚先輩はあたしの声に満面の笑顔。

「んじゃ、楽しみにしてるわ。」

「さ、次の練習に行くぞ！」

部長の声を合図にみんな運動場へと散っていく。

「あかりちゃん、もしかして雄輔くんと付き合ってるの？」

みさと先輩に聞かれていいえと答えたあたし。

「幼馴染なんです。幼稚園からずっと一緒に・・・」

「ふーん。」

でも、さっきのあれって幼馴染って感じじゃないわよね。」

「はい？」

みさと先輩はニコツと笑って

「ま、困った時は言って

相談に乗るからね」

って、あたしの背中をトンと叩いた。

だったら・・・今度の土曜日

かわってくださいよ・・・

部活が済んで、帰り支度を終えて

いつものように雄輔と帰る。

帰り道、何も言わない雄輔に

「何怒ってんのよ。」

って、恐る恐る聞いてみた。

「バカヤロー！」

たった一言、雄輔は吐き捨てるように言った。

「なんで絶対嫌って言わなかったんだよ。」

「あそこで絶対嫌って言える？」

何か野球部の恒例だと言ってたし。」

だからあきらめて・・・って言われたっけ。

「んなこと知るか！」

思いつきり不機嫌な顔でそっぽを向く。

ここまであたしに怒るのって珍しい・・・

「とにかく、デートくらい、仕方ないじゃない。

それ以上って言われたら

そりやすんごい困るけど。」

って、言ったら言い終わると同時に

「当たり前だろ！」

って、また怒る。

・・・雄輔、そんなに怒らないでよ・・・

「お前、デートくらいってなあ、

甘過ぎんだよ！

何かあったらどうすんだよ。

しかもあの、小塚だろ……！」

チツと舌打ちしながら雄輔は

イライラを隠そうともせずに怒ってる。

雄輔……それ考えすぎ。

っていうより、いつからそんなに心配症になった？

「あかりはトロクセーから

気付いた時にはどうしようもなくなってるぜ。」

何がだよ……ったく……

いつまでもグダグダ言ってる雄輔に

あたしもイライラしてきた。

「雄輔！そんなこと言っただったら

一番にあんたが帰ってくりゃ良かったじゃん。

そしたら、いつまでもうじうじ

愚痴ってることもなかったんでしょ！

自分が負けたくせにみつともないって！」

「何だと！」

言い過ぎたと思ったけど

あたしも止まらない。

「雄輔にそんな言い方される覚えはないわよ！

雄輔こそみんなの空気読めば！

デートでみんなが頑張るんだったら

マナージャーとしちゃ本望よ！」

一瞬、キツと雄輔の目がきつくなる。

・・・な・・・なによ・・・

33

「オトコを甘く見んなよな。」

雄輔はそれだけ言っ

後は何にも言わなかった。

・
・
・
・
・
・
・

そして土曜日。

「おはようございます。」

「おはよ。可愛いじゃん」

「もー、いいですよ、お世辞言わなくても。」

「いやいや。マジで。」

小塚先輩はいつもの制服やユニフォームと違い
ジーンズに綿シャツだった。

おー、何か雰囲気違ってる。

「じゃ、とりあえずこれ。」

切符を渡されて改札を通る。

表示されている金額を財布から出そうとすると
上から手を押さえられた。

「今日はデートなの。」

そのくらいいいから。」

「でも……」

「いいから。」

「……じゃあ……ありがとうございます。」

満足そうに笑う小塚先輩。

「この前オープンしたでっかい店、

行ってみようかと思うんだ。」

「あ、この前みんな言ってたやつでしょ。

行きたかったんだ!」

「そりゃよかった。」

電車で揺られながらあたしはウキウキ。

可愛い文房具も、おしゃれなカフェもあるらしい。

あ．．．でも先輩はイヤかな。

その時はちよつと別行動つてことで

「あ、降りる駅だ。」

先輩が立ち上がった。

あたしも席から立ち上がった。

さりげなく手を引かれて少し混んだ電車を降りる。

げ．．．この手は何？

「はぐれるといけないからね。」

たくさんの人波に流されるように進みながら

小塚先輩は不審げなあたしにそう言った。

34

新しいお店は思った通り

目移りしそうなものがたくさんあった。

それに美味しそうなものもどっさり

ドーナツやパンをいくつか買った。

可愛いメモ帳も買った。

綺麗な色の消しゴムも。

普段使うちっちゃなものでも

新しくお気に入りが増えるのは嬉しい。

「あ．．．いろんな種類があるんだ．．．」

「寄ってごうか。」

30種類もあるソフトクリーム屋さんを見つけ、

小塚先輩と一緒にソフトクリームで

ちよつと休憩。

あたしはチョコにブルーベリー。

小塚先輩は桃とヨーグルト。

こんなソフトクリームは初めて見たよ・・・

2種類のクリームがミックスされているので

色目も綺麗。

今度みんなにも教えてあげようつと。

・・・と、突然のことだった。

「それ、味見させてよ。」

そういうと、あたしの手をキュッと掴んで

あたしのソフトクリームをぺロリ。

え・・・・・・・・!!!!!!

「オレのもどう?」

ニコツと笑ってあたしに差し出すけど

「・・・・いいです・・・・」

思いつきり動揺して答えるあたし。

「遠慮しなくていいのに」

楽しそうな先輩の声に

『遠慮なんてしてないですって・・・・』

と、心の中で突っ込んだ。

食べかけのソフトクリーム・・・・

これ、このまま食べてもいいかな・・・・

でも、それって・・・・間接キスとか?

どうしよう……………

まさか目の前で捨てるとか出来ないし…………

……………

そんなあたしお迷いを見た先輩は

「そんなに悩むことないだろ…………

友達と分けっことかしない？

ほら早く食べないと溶けちゃうぜ。」

…………意識しすぎてこと？

……………

ソフトクリームはいつしかツーーと溶け始めて

あたしは慌てて舌でそれを受け止めた。

慌てながらソフトクリームを食べるあたしを

小塚先輩は面白そうに見ていた。

そして、

「また来週もデートしない？」

なんて真面目な顔して言った。

「それは出来ません。」

即答するあたしに小塚先輩は苦笑い。

「えらく返事早いね。」

それでも、オレ、結構もてる方なんだけどな。」

それはそうだろう。

どこことなく嵐の二宮くんに似た小塚先輩。

もてそうな感じはする。

あたしも好きか嫌いかって聞かれたら

チームメイトということ差っぴいても

好きに分類されるかもしれない。

「じゃ、また部長にご褒美貰うか」

ニコツと笑って、本気が冗談か

そんなことを言った。

夕方までショッピングしたり、

ゲームセンタ に行ったり、ご飯食べたりして

結構楽しく時間を過ごした。

気が付けばもう6時になっていた。

「そろそろ帰ろうか。」

「はい。」

最寄りの駅まで送ってもらって

「じゃ、ここです。」

と、家まで送るという先輩を断った。

はあ・・・一応義務は果たしたよ・・・

と思った時、

!!!!!!!!!!!!

「じゃ、また学校でな。」

と、改札でニツコリ微笑んで

ホームへと消えていく先輩。

一瞬何が起こったのか分からなかったけど

ほっぺたに柔らかい感触と

肩に熱い手を感じて固まった。

．．．．．

見事な去り際．．．．．

しかしなんて早業だろう．．．．

翌日、部活に行くと

みさと先輩が興味津々で話しかけてきた。

「土曜日、どうだった？」

顔にニコニコワクワクを一杯に張り付けて

あたしの答えを待つまさと先輩。

「え？いや別に・・・何も・・・」

ドキツとしながらもそう答えると

「あの小塚先輩に限って何もないなんて

そんなバカな事はないでしょ」

????

はてなマークだらけの顔をしたあたしに

「知らなかったの？」

小塚先輩って手が早いので有名なんだから。」

そうなの？

そうだったの？

だったらあの早業も納得……

「その顔はやっぱり何かあったでしょ？」

「なになに？」

あかりちゃんが小塚の手に落ちたって？」

「うそ……マジで？」

近くで聞いていた先輩たちも

何か知らないうちに話に入ってきてるし……

しかもどんどん変な話になってるし。

「違いますよ！何にもないってば！

健全なデートです！」

真っ赤な顔して怒って言うあたしに

後ろから突然意外な言葉が飛んできた。

「そんなに怒ってるっていうことは

不健全なデートがしたかったってこと？

それならそう言ってくれたらよかったのに」

「……………何をおっしゃるうさぎさん……………」

いや、小塚先輩……………」

「ということでは、部長、もう一回褒美くれよ。」

にこやかに言う小塚先輩に部長の信じられない一言。

「だったら、今日もロードワーク行くか

マネージャー もいいよな。」

あたしに部長が言う。

「・・・出来れば勘弁してほしいです。」

あたしの答えに

「何言ってるの。」

マネージャーってみんなのアイドルなんだぜ。

すんげーご褒美らしくって

やる気出るよな みんな!」

「おう!」

盛り上がるみんなにあたしは何も言えなくなった。

そんなもんなのか？

イケメンぞろいなのにマネージャーが少ないのは

オーディションもあつたけど

こんなところにも原因があつたのか・・・

「そんなんおかしいだろ！

嫌がつてんじゃねーか！」

突然、つかつかと雄輔は部長の前に出ると

大声で言い放った。

「へえ、雄輔、お前何カッコつけてんの？

それともマネージャーが好きとか？」

「そんなんじゃねーけど、

マネージャーは景品じゃねーだろ！」

「いいじゃねーか、みんな頑張んなら。」

「よくねーよ。」

睨みあう雄輔と部長。

嬉しいけど、そんなことして大丈夫？

先輩にこれから先、目つけられるよ？

「雄輔、やめなよ。」

「ウルセ。お前は何で平気なんだよ！」

雄輔が壊れそう・・・

マズいな・・・

「そんなに言うんなら、

お前が一番で帰ってくりゃいいじゃねーか。

そしたら誰も文句は言えねーぞ。

もちろん、そんなこと俺がさせねーけどよ。

それに、デートの続きもしたいしな」

小塚先輩が挑発的に雄輔に言った。

「おもしれーじゃねーか。」

よっしゃ、ぜってー一番で帰ってくるから。

ほら、さっさと号令掛けろよ!」

単純というか、乗りやすいというか……

部長はニヤツと笑って

「さっさと並べ!」

とみんなに号令をかけた。

「よーい!どん!」

みさと先輩の声に、一斉にスタートを切る。

ロードワーク嫌いな雄輔が

真面目に走ってるよ……

「雄輔くん、カッコいいじゃん。」

みさと先輩がニツと笑ってあたしに言った。

「愛されてんねえ

ゴールしっかり見ててよ。」

そう言い残すと、折り返し地点のチェックへと

自転車を走らせて行った。

いくらなんでも

3年生に勝てるわけないじゃん。

雄輔、体力の差を甘く見てんじゃないよ・・・

でも、

正直、嬉しかった。

これで一番でほんとに帰ってきたら

もっと嬉しいけど・・・

ま、無理だよな・・・

じっと待つこと20分。

遠くに人影が見えてきた。

．．．．．

あら．．．また一番は小塚先輩．．．

やっぱりね。

だから雄輔、体力的に無理だつてば．．．

気持ちは嬉しかったけどね．．．

なんて思ってたら．．

小塚先輩のすぐ後ろから

雄輔が戻ってきた。

うそ．．．．

『オレはやるときゃやるんだよ。』

笑いながらいつか言った雄輔の言葉を思い出す。

ほんとだ・・・

「結構しつこいな。」

「うるせーよ、お前になんか負けるか。」

「先輩にお前呼ばわりたあ生意気だ！！！」

走りながら二人が絡み合った。

え？小塚先輩、足引っ掛けてる？

雄輔、先輩叩いてる？

あれ？あれ？と見てる間に

二人は道の真ん中でもつれあって

殴り合いを始めた。

ちよつと・・・

ゴール間近にして、

あの人たちは何をやってるんでしょうか。

「あほ！早く起きてゴールしねーか！」

部長がその横を颯爽と走る去っていきながら

二人に叫んだ。

はっとして起き上がる二人。

その間に、余裕かまして部長はゴールした。

・・・

あ
ほ
・
・
・
・

結局今回のトップは部長だった。

「お前らバカだろ。」

部長に言われて

「「コイツと一緒にすんな!」」

と二人してハモる雄輔と小塚先輩。

・・・

「とにかく今回は俺が一番ということで・・・」

ニツと笑ってあたしとみさと先輩を見る部長。

「で、あたしと土曜日にデートね。」

久しぶりだなあ　ねえ？俊介」

みさと先輩がニツコリ笑顔で言った。

え？

みんなが同じ気持ちで部長とみさと先輩を見た。

「おい・・・何言って・・・」

「今の時代、逆指名も有りだかね。」

今回のご褒美は先輩マネージャーのあたしが

逆指名ってことで。」

そう言ってみさと先輩はあたしにウィンク。

「しゃあねーなあ・・・」

と言いつつ、何か知らないけど

あたしは今回お役御免ということで・・・

「そっぴゃ、あの二人って前に付き合ってたっけ・・・」

誰かがぼそつと言った言葉に

みんながひそひそと騒ぎだす。

「え？じゃ、マジデート？」

「土曜日だってさ。」

「見に行こうか」

「面白そう！」

って盛り上がってる横で

「雄輔・・・あんたゴール前で何やってたの？」

って、雄輔の隣に座ってそつと聞いた。

「アイツが足引つ掛けてきたからさ、

そんな汚い真似にはお返しを・・・と

ぶん殴ってやった。

そしたら殴り返してきやがって・・・」

「ほんと、バカだわ。」

呆れたあたしが言うつと、

「誰のためだと思ってんた!」

「誰のため?」

「・・・・・・ウルセ。」

分かってたよ。

あたしのために頑張ってくれたんだよね。

ま、救ってくれたのはみさと先輩だったけどね。

ちゃんとお礼言っとなきゃ。

「みさと先輩、ありがとうございます。」

みんながグラウンドに散った後、

あたしはお礼を言いに行った。

「いいの、いいの。」

「つていうか、あたしも嬉しいし。」

「え？」

ニツコリ笑ったみさと先輩は

ちよっぴり遠い目をして言った。

「さっきみんな言ってたでしょ？」

「あたし、俊介と付き合ってたんだ。」

.....

「小塚先輩もだけど、俊介も結構

ノリで女の子とチャラチャラすんの好きだし

ああいうのと付き合つと

彼女としてはしんどいわけ。

で、別れちゃった。

でもね……実はまだ好きだったりすんのよね。」

……

初めて知つたよ……

「あかりちゃんは、雄輔くんでしょ？」

あの小塚先輩に落ちなかつたんだから

よっぽど好きな人がいるんだよねって

みんなで噂してたんだ。」

「え……あの……」

いきなりな発言に戸惑ったあたしに
みさと先輩はくすつと笑った。

「あんなに一生懸命になつてくれて
嬉しくないわけないじゃん。

うらやましいなあ。

で、ちょっと意地悪しちゃった」

え？

「俊介は、小塚先輩で落ちなかったあかりちゃんを
プライド掛けて落そうと

企むようなヤツなのよね。

落ちた女の子にはかわいそうだけど

ま、後は続かない。

お気の毒なんだよね……

ま、そんなアイツに惚れたあたしが

一番かわいそうかも知れないけどね。」

寂しそうに笑うみさと先輩は

なんだかあたしよりずっと大人の顔してた。

「ま、雄輔くんなら俊介みたいなことは

なさそうだし、頑張ってね。」

明るく言われて、思わずはいと返事すると

「やっぱりそうなんだあ。」

って、ニツコリ満面の笑み。

「え　いつから？」

もしかしてもう付き合ってるの？

デートとかした？

もしかしてその先も？」

いえいえ・・・

タジタジ・・・となるくらいの勢いで

質問の嵐。

「で、何か困ったことがあったら

何でも相談してね」

と、みさと先輩は

あたしの肩をポンと叩いて言った。

なぜかその場のノリで、

野球部一同、土曜日の極秘指令が一気に発令された。

『部長とマネージャーのデートを見届けること！』

もちろん彼らには内緒で。

欠席は必ず小塚先輩に報告すべしと……

これも部活なのか？

あたしは、みさと先輩に言うわけにもいかず

雄輔に愚痴ってみた。

「デートの覗き？

んな悪趣味な……

雄輔もそう思うでしょ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄輔は何も言わない。

「みんなそんなことに興味あんのかな。

へんなの・・・・」

みさと先輩の気持ちを聞いちゃったあたしは部長とのデートは楽しんで欲しいなっと思う。

なのに面白がってついてくなんて・・・

「ま、ばれずに最後までついてくなんて

不可能だろうけどね。」

「んなことねーだろ。」

初めて雄輔が答える。

「だってあれだけの人数がうろつろしてたら

絶対ばれるって。」

「じゃ、お前も気付いてたのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

今・・・雄輔、怖いこと言いました？

あたしが？

何に気付いてたって？

!!!!!!!!!!

「もしかしてみんな見てたの？」

「あたり。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

雄輔が最近イラついてるのも

口数が減ったのも

もしかして見てたから？

小塚先輩、結構接近してたよね・・・

あれをみんなに見られてた？

ウソ・・・

そこではっと気付く。

『あの小塚先輩に落ちなかつたんだから

よっぽど好きな人がいるんだよねって

みんなで噂してたんだ。』

みさと先輩は確かにそう言った。

みんなで噂してるって・・・

みんなが知ってるってことだよね。

.....なんてこと.....

部長とマネージャーのデートの日は

なぜか学校に一旦みんな集合して

小塚先輩の指示を聞く。

「お前たちは電車で行け。

隣の車両から目を離すな。

駅に着いたら降りたのを確認して

どこで降りたかオレのケータイに連絡しろ。

オッケー？」

「ラジャー」

「んで、後の奴らは一本後の電車で行くぞ。」

「了解！」

着々と進んで行く追跡劇に

あたしは思わず雄輔に聞いてしまった。

「ねえ、この前の時もこんな感じだったの？」

「ああ。っつーか、これ、恒例らしいぜ。

もしかして知らなかった？」

「うん。」

知らないよ・・・そんなこと。

「でも、少なくとも小塚は知ってたぞ。

分かっててあそこまでやるんだからすげーよな・・・」

ボソツと言った雄輔があたしを見て言った。

「当然部長も知ってるよね。」

「だろうな。だから多分、必死で巻くぞ。」

「小塚先輩は・・・」

巻くとかそんなことしなかったけど・・・」

思い出してもそういうそぶりはなかった。

「だろうな。」

公認であかりを落とすつもりだったんだろ。」

うそ・・・」

「ま、失敗に終わってよかったけどな。」

「そーだね・・・」

なんて言ってるうちに

みんなで移動開始。

あたしも慌ててみんなについて行った。

43

小塚先輩は慣れた様子で

ケータイでの連絡を受けながら

楽しそうにデートの追跡をしていた。

『小塚さん、二人は海岸沿いに

散歩に行くみたいです！』

報告を受けた小塚さんは

それを聞くとみんなに言った。

「海行くぞ。」

海なら人が多くて見つかりにくい。

「3人以上にはなるな。目立つ。いいな。」

「オッケー」

「じゃ、オレマネージャーと行こうかな」

「あ、オレも！」

「待てよオレも！」

「……3人までとおっしゃいましたよね……確か。」

勢いにおびえて一步下がると、

「マネージャーは初めてだからオレが連れてく。」

「いいよな。」

と、小塚先輩が側に来た。

「冗談じゃねー。」

お前みたいなヤツに任せてられっかよ。」

と、雄輔が小塚先輩の前に立つ。

「オレと張り合おうなんていい度胸だな。」

「1日かかって落とせなかったくせに

偉そうな口きいてんじゃねーよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

この二人・・・・

やっぱりどこことなく似てるわ・・・・

そう言ったら二人して違うと声をそろえて言うだろうけど。

「ほら、早く行かないと！

雄輔も、先輩も行きますよ！」

あたしはその場の凍った空気を抹殺すべく

そう言って歩き始めた。

みんなもほっとして海を目指す。

程なくついた海は、どこもかしこも人・・・・

なのに目指す二人はすぐに見つかった。

二人仲良く並んで木の影に座っている。

「ふーん、なかなかいい雰囲気じゃん。」

「そりゃ元恋人同士だかな。」

「もしかして良いもん見れるとか？」

「何期待してんだよ、ボケ！」

いろんな声を聞きながら

あたしもこうして見られてたのか・・・と

改めて愕然とする。

「先輩・・・」

隣を歩いていた小塚先輩に確かめたくなった。

「なに？」

「この前の時もこうやってること知ってたんですね。」

「ああ。知ってたよ。」

「だったらなぜ・・・」

「巻かなかったって？そりゃ・・・」

小塚先輩はニヤツと笑って

「オレのモンってみんなに知らせたかったからね。」

とのたまった。

「誰がお前のもんだと!？」

あたしが言うより早く反対側から突っ込みが入った。

「話に割り込んでくんない！」

「黙ってられっかよ！」

「何?!」

あたしを挟んで喧嘩すんのはやめて欲しいぞ・・・

「「「お!!!!」」」

突然、近くから声が上がった。

はっとしてそっちを一斉に見る。

あ・・・・・・

みんなの視線に先には

この暑い天気にも負けなくらいの

アツ~~~~い口づけを交わす

部長とみさと先輩がいた。

「きゃ！」

思わず目をそらして顔を覆ったあたし。

離れてるからとはいえ

何してるかばつちり見えて・・・

恥ずかしすぎる・・・

「すげー・・・」

「うらやましい」

みんなは目をそらさずにじっと見つめてる。

あたしはどつすねばいいのよ・・・

一人ドキマギしてるあたしの手を

雄輔がグイッと引っ張った。

「え？」

思わず雄輔の顔を見上げる。

「やってらんねー。」

何が楽しくて人のラブシーン見てんだか。

オレ、帰るわ。行くぞ。」

みんながあっけに取られてる中を

雄輔はあたしの手を引き

ずんずん歩き始めた。

「おい！待てよ！」

小塚先輩の声に雄輔が振りかえる。

「あんたもこんなバカなことしてねーで

もうちょっとましな遊び方しろよ。じゃあな。」

雄輔の捨て台詞にみんなが固まる。

……もうちょっと言い方があってしょうに……

「雄輔、先輩とあんまりもめない方がいいよ。」

雄輔と歩きながらちょっと忠告してみる。

ややこしい事になるとイヤだもん。

「大丈夫。心配すんな。」

「でも……」

「んなことでグジグジ言うようなヤツは

ぶん殴ってやるから。」

……そんなことしたら停学とか部活停止とか

余計ややこしくなるんじゃないか？

ちったあ考えようよ。

「腹減ったあ、なんか食いにいこーぜ。」

いきなり雄輔はニツコリ笑って話を変えた。

その笑顔、予想してなかった分

心臓に悪すぎます。

しかも……

気が付けば、さっき引つ張られたまま

雄輔はあたしの手をしっかりと握っていた。

マズイ……顔が赤くなる……

「ハンバーガーでいいよな？」

「うん。」

なぜか照れながら答えるあたしに

雄輔は不思議そうな顔をした。

「ん？ハンバーガーって嫌いだった？」

んなことねーよなあ？」

嫌いじゃないよ。

嫌いじゃないけど

今は思考がそれどころじゃないんだよ！

この手・・・あたしはどうすればいいんでしょうか・・・

出来たらこのまま繋いでたいよ・・・

ちよっとうつむいて

あたしは歩いた。

「部長たち、どうなったかな・・・？」

まだみんな追いかけてんのかな。」

「多分な。」

「この前も雄輔、先に帰ったの？」

「いや・・・最後までいた。」

やっぱりほっぺのチュッは見てたわけだ・・・

恥ずかし・・・・・・・・

出来ることならみんなの記憶から消し去りたい・・・

「あんなヤツに近寄らせんな。ボケ！」

雄輔のつぶやきに思わず噴き出した。

「じゃ、誰だったらいいの？」

笑いながら言った言葉に即答で帰ってきたのは

「オレ。」

だった。

46

あまりに簡単な

あまりに直球すぎる雄輔の答え。

あれからあたしの頭の中には

雄輔の一言がリフレインしている。

「あんなヤツに近寄らせんな。ボケ！」

「じゃ、誰だったらいいの？」

「オレ。」

そんなこと言われたら

あたしはどうしたらいいんだろう。

それって、それって、

どう解釈するといいの？

あのセリフの後の雄輔はいたって普通で

でっかい口あけて

美味しそうにハンバーガー食べてた。

食べっぷりの良さは昔からだけど・・・

あたしはあたしで、

大好きなチーズバーガーを

これまた大口開けて食べてたけど。

なんせ、相手が雄輔だと

今更取り繕ってもしようがないってのもあるし・・・

変におちよぼ口でなんか食べてたら

雄輔、絶対笑うし。

「なにお上品ぶってんだよ！

似合わねー」

とかってからかうにきまつてる。

「ねえ、月曜から部活行きにくくない？」

捨て台詞吐いて抜けてきたんだから

それなりに先輩からなんか言われんじゃないか？

って心配してるあたしに雄輔は言った。

「んな、お遊びに付き合わねーくらいで

グチグチ言っような先輩なんざ

オレがぶちのめしてやる。」

ニヤツと笑って言う雄輔は

中学時代のやんちゃな顔をしていた。

「ほらぁ・・・またそんなこと言って。」

つまらないトラブルには

巻き込まれるだけ損だって知ってんでしょ！」

それで散々嫌な思いもしたくせに。

「じゃ、オレが暴走しそうになったら

あかりが止めりゃいいじゃん。」

「あたしが雄輔をどうやって止めんのよ！

あんた怒ると、押さえ効かないじゃん。」

人の言うことなんか聞きやしないからねえ。

雄輔は。

「抱きついたら止まるかもよ」

.....

あっけに取られるあたしを見て笑う雄輔。

冗談じゃない。

そんなことできるかあ！！！！

って思ってたのに…………

次の月曜日。

「ほら！遅れんなよぉ！」

部長と小塚先輩はきりつとした顔で

練習をスタートさせた。

土曜日のことなんてこれっぽっちも

頭がないみたい。

無事いつも通りの練習が始まってホッとした。

「先輩、もしかしてより戻しました？」

みさと先輩と二人きりになった時

あたしは聞いてみた。

「え ？そんなことないけど。」

俊介も別に何も言わなかったし。」

うそ……

何も言わずにこの前のあの

みんなをくぎ付けにしたキスは

何だったの？

あたしのびつくりした顔を見て

みさと先輩はクスクス笑った。

「えー？今どきあのくらい普通でしょ？」

「違うと思いますけど……」

「もしかしてあかりちゃん、まだ？」

「誰とするんですか……そんなこと」

思いっきり照れながらも否定する。

「誰とって・・・もしかして雄輔くんと

まだ何にもないの？」

「ないですケド・・・」

何・・・

無い方がおかしいとでもいったそうな視線・・・

今どきってそうなの？

ウソだあ。誰かウソだと言ってよ。

その頃・・・

「なあ、雄輔、土曜日あの後どこ行っただ？」

「え？イヤ別に・・・飯食って帰ったけど？」

「まあたまたあ

マネージャーの手しっかり握って

どこにもいかねーなんてありえねーっつの。」

ニヤニヤしながら

いいなあって顔して雄輔を囲むやつらが3人。

「練習中だろ。」

「そう言わずに教えろよ。」

「何もねーっつってんだろ！！！！！！」

イラッとした雄輔が思わず怒鳴る。

その声は運動場に響き渡った。

「こら、何騒いでんだ？」

キャッチボールをしていた部長が

雄輔たちのところへやってきた。

「何もないっす。」

平然と言い放ってキャッチボールをしようとした雄輔に

2年の先輩がまた絡む。

「んな隠すことねーだろ？」

あんなだけ派手に見せつけといて

何もねーわけねーだろ。」

ニヤニヤした顔に向かって雄輔は

いきなりボールを投げつけた。

「あぶねーだろ！」

「あぶねーのはお前の頭だろ！」

一触即発の空気をぶち破ったのは

部長だった。

「お前ら頭冷やして来い！」

ランニング3周！」

ああいうところは、はじめがついて

部長はカッコいいと思う。

ふと隣を見ると、みさと先輩が珍しく

部長に見とれていた。

渋々ランニングを始めた雄輔たちに

みんなが興味津々で目を向ける。

「あんなに怒るってことは

やっぱ凶星か？」

「ちょっと閉めて吐かせるか？」

「いやぁ・・・アイツは口割らねーな。」

勝手な事を言っている部員に

「お前らも走りたいか？」

と部長が気味悪いくらいの笑顔を見せた。

やっと落ち着いたらしい運動場にほっとしたあたしに

「で。あかりちゃんの方は？」

王子様にさらわれた後、何してたの？」

って、ニツコリ聞いてきた。

何してたって・・・

「二人で大口開けてハンバーガー食べてました。」

「それから?」

「もちろん家に帰りましたけど?」

「途中でどこか寄らなかったの?」

「はい。」

「せっかく二人だったのに?」

「・・・・・・・・・・」

「だって・・・・雄輔が帰ろって言ったから・・・

用事もなかったし。」

あたしの答えにみさと先輩は

くすつと笑って

「普通は用事がないから帰らないんじゃない?」

って言う。

そうかなあ・・・そうかもしれない。

でもデートじゃなかったし・・・

なんて思ってたらかがフェンスにぶつかったような

大きな音がした。

びつくりして音がした方を見ると

走ってたはずの雄輔と先輩たちが

フェンス際で睨みあってる。

さっきの音は

雄輔の背中がフェンスにぶち当たった音らしい。

雄輔をフェンスに押し当てているのは

2年の福井先輩。

綺麗な顔してるけどちょっと性格悪い福井さんは

何かと雄輔をからかうようなことを言っていた。

「ちょっとあんたたち、何やってんのよ!」

みさと先輩が走りながら声をかける。

それには答えず、福井先輩は

雄輔を睨みつけていた。

「謝れよ！」

「お前がわりいんだよ。謝んのはそっちだろ。」

意外と冷静に受け答える雄輔。

でもその目が・・・怒ってるよ・・・

「生意気なんだよ！」

「1年のくせして！」

「ちょっと福井君、手離したら？」

みさと先輩の言葉にもまるつきり耳を貸さない。

「いい加減離せ。」

雄輔が低い声で言う。

「お前が謝ったらな。」

「いいから離せつつってんだろ！」

そう言った瞬間、雄輔の腕が福井先輩の腕を叩き落とした。

「いつてえ・・・このヤロ　！！！」

福井先輩が雄輔の顔めがけて

拳を突き出した。

綺麗にヒットしたパンチに、雄輔がよろめく。

「殴り返してみろよ。お前のマネージャー、

見てるからいいカッコしてーンだろ！」

挑発するように雄輔をあおる福井先輩。

あんたねえ・・・

雄輔じゃなくっても怒るって。その言い方。

でも、ここは、マネージャーとしては

喧嘩を黙って見ておくわけにいかない。

怪我でもされちゃ大変だし、

おおごとになったらそれこそみんなが迷惑する。

「雄輔！ダメ！」

殴りかかる態勢を取り始めた雄輔に

思わず声をかけた。

そして、雄輔と福井先輩の間に強引に割り込み

両手を広げて雄輔を止めようとした。

「福井君もそこまでにしときなつて。」

みさと先輩も止めに入る。

「「そこ、のけ！」」

あたし達の頭の上で二人の声がハモる。

お願いだからこんなところで喧嘩しないでよ・・・

まさかこんな所で

実現するとは思わなかったな・・・

ただただ夢中で

「雄輔！落ち着いて〜〜〜！」

って、ギュっとしがみついた。

あたし達、昔からよくじゃれあってたから

あんまり深い意味もないんだけど。

「おい・・・」

呆れたような雄輔の声が頭の上から降ってくる。

しんと静まり返ったグラウンドに気付いたのは

たっぷり30秒は経ってからのこと。

「へーえ、おとなしそうな顔して

やるときややるじゃん。」

ちよつと動揺を隠しきれない福井先輩は

顔が引きつてる。

「もういいから。」

雄輔が落ち着いた声で言った。

「は？」

「は？じゃねーって。」

そう言われて改めて周りを見ると・・・

「ゲエ！！！」

思いつきり変な声をあげて

あたしは雄輔から飛びのいた。

「なんつー色気のねー声出すんだよ。」

雄輔が苦笑してる。

それどころじゃないよ……

みんなが見てるじゃん……

変な意味で注目集めちゃった……

「んもう あかりちゃんってば

そういうことは二人っきりの時まで待ってよね」

みさと先輩が固まったその場の空気を

さっと降り払うようにさらっと言って

「ほら！早く練習！」

って、みんなを練習に追い立てた。

「やっぱり仲いいよね」

みさと先輩がうらやましそうに言った。

麦茶のコップを洗いながら

さっきの騒動が収まってホッと一息。

「あたしは公衆の面前で

あそこまで密着出来ないわあ」

ニコニコと笑って言うみさと先輩に

心の中で『よく言うよ・・・』

と一人突っ込み。

あたしは公衆の面前で外国人ばりのチューは

出来ませんって・・・

面前でなくてもしたこと無いけど。

「でも、あれでみんなびっくりして

怒ってるどころじゃなくなったし、よくやったよ。

えらいえらい。」

「そんなに偉くないですけど・・・。」

なんていいつつ、真っ赤になって照れてしまうあたし。

今更ながら、恥ずかしいことやっちゃったよな・・・

「喧嘩の後始末はちゃんとしてもらっからな。」

部長の宣言により、

居残り練習と片付けを仰せつかった雄輔と

福井先輩たちの下校時間は

みんなに遅れること30分。

部長は知らないだろうけど

一番最後の後片付けて

あたしがしてんのよね・・・

彼らが帰らないとあたしも帰れない。

薄暗くなりかけた校庭でトンボをかけてる雄輔を

一人眺めてる。

気付かなかったけど

遅しくなってた。

男の子ってあんなに体が硬いんだ・・・

ふと筋肉質の体の感触を思い出してまた赤面。

「さ、部室のゴミ捨てでもしよう。」

あたしはみんなが帰ってしまった部室に

ゴミ箱を取りに行った。

ガラッ。

ドアを開けた瞬間……

誰もいないと思ってたのに

部長とみさと先輩がいた。

しかも……

こんな至近距離で見てしまったよ……

この前にも増して情熱的なキスシーン……

「あ・・・ごめんなさい！」

慌ててドアを閉めて後ろを向く。

あーびつくりした。

顔も熱い。

きつと真っ赤になってるだろう。

胸もドキドキして収まらない。

「何やってんだ？」

一人で真っ赤な顔して。

熱でもあるのか？」

トンボを片付けて雄輔がやってきた。

「ダメッ！」

部室に入ろうとした雄輔を
必死に押しとどめるあたし。

「なんで？」

「何でも！」

「悪かったな。もう入っていいぞ。」

部長が出てきた。

後ろからみさと先輩も出てくる。

あたしと、部長たちを見ていた雄輔は

「へえ」

って、一言言つと、

一人納得した顔して部室に入った。

「じゃ、あたし達は先に帰るから。」

戸締りよろしくね。」

みさと先輩に声をかけられて

「はい！」

と、顔を見られずに答える。

先輩たちの背中が見えなくなっても

雄輔は部室から出てこない。

何やってんだろ・・・

「雄輔？」

外から呼びかけてみる。

返事がない。

「ちよつとおー。」

返事がない。

.....

探し物でもしてるのかな・・・

あたしは部室のドアを開けた。

そつと部室のドアを開けると

部室の真ん中に置いてある

ベンチプレスに雄輔が寝っ転がってる。

別に筋トレしてるわけでもなく。

「何してんの？早く帰ろうよ。」

「ああ・・・」

生返事を返す雄輔は

一向に起き上がる気配がない。

どうしたんだろう。

「ほら、起きてよ。」

雄輔の手を引っ張って起こそうとすると

いきなりむくつと起き上がって

逆に手を掴まれた。

「ちよーどいいや。

ちよつと座つて。」

隣に座らされてちよつと緊張するあたし。

「な・・なに？」

「あかりはオレに触つても平気なわけ？」

えらく深刻な顔してるところたら

そんなこと？

「オレは・・・・・平気じゃねーけど。」

答えを待つ雄輔はあえて視線を合わさない。

「さっきは夢中で・・・ほら雄輔は喧嘩っ早いし。

先輩殴ったりしたら大変でしょ、だから・・・」

「思いっきり抱きつくってか？」

「いや・・・だからその成り行きで・・・」

何だか変な空気なんですけど？

「じゃ、成り行きつてことで・・・」

雄輔の腕があたしの肩にまわり

あっという間に引き寄せられた。

なによ・・・こんなこと今まで

一度だって無かったのに。

こんなのいや！

唇が奪われるって表現は

あたしだって聞いたことがある。

でも……

勝手に奪わないで頂戴！

あたしの手は盛大に音を立てて

雄輔の頬をひっぱたいた。

バカ・・・バカ・・・雄輔のバカ！

あたしは一人薄暗くなつた道を帰りながら

悲しくて仕方なかった。

女の子たるもの、

ファーストキスに夢を見ることくらい

想像つかないんだろうか。

あんなのがファーストキスなんて

悲しすぎるでしょ・・・

相手は大好きな雄輔だけど

ほんとはちゃんと心を通わせて

ちゃんと目を見て、

優しい言葉の一つもかけられて

それで、甘い時間を共有したかった。

なのに・・・

思い出しても悔しくて

成り行きだなんてサイテーな事言われ

雄輔にとっちゃ、大した意味もない

そんな行為だったんだろうか。

それからあたしは雄輔の顔が

まともに見られなくなった。

というか見たくなくなった。

好きな人に裏切られた気分というのは

なんとも言えず複雑で

裏切られたといっても

あたしの中でそう受け止めてるだけで

雄輔にとっちゃ“なりゆき”なんだけど。

「あかりちゃん、どうしたの？」

雄輔くんとけんかでもした？」

みさと先輩に言われて、

思わず胸の内を漏らした。

「あかりちゃんって可愛いね」

みさと先輩はニッコリ笑ってあたしを見た。

「どうしてですか？」

不思議そうに聞くあたしに先輩は言った。

「だって、恋愛に夢見てて

それを大事にしてて・・・・・・・・・・

擦れてないっていうか、初々しいっていうか」

初心者ってことですか・・・・・・・・？

ま、そうなんだけど。

先輩は真顔に戻ると

必死にボールを追う部員たちを見ながら

あたしに言った。

「相手も同じ年なんだからね。

王子様役を求めるのは、ちと酷じゃない？

俊介もそうだったけど、

結構いっぱいいっぱいみたいだよ。

恋する男の子もね。」

・
・
・
・
・
・
・

練習が終わったら

あたし、雄輔に謝ろう。

そしてちゃんと、

どうして怒ったかを伝えよう。

そんな話を真面目にするのって

とっても照れくさいけど

このままだとどうしても普通に接するなんて

無理に決まってる。

今日だって、朝も雄輔とは

全く顔を合わさなかった。

ずっと一緒に通ってきたあたし達には

今まで無かったこと。

「ちゃんと話します。

みさと先輩見たいにはなれないかもしれないけど。」

他意は無くそう言ってしまうて

次の瞬間赤面。

「あら、心が通じたらすぐになれるわよ」

さりげなく笑顔で恐ろしいことを言っみさと先輩。

あたしと雄輔が？

あの日の部室での部長とみさと先輩が

フラッシュバックした。

.....

想像しただけで顔が熱い。

無理ですって。あたしには。

一人照れてるあたしを面白そうに

みさと先輩は見ていた。

「あ、あかり、ちょっと話があんだ。」

部活がすんだ途端

あたしは雄輔に声をかけられた。

「あ、あたしも話があつたんだ。」

一瞬、え？って顔した雄輔。

誰もいなくなつたグラウンドで

雄輔があたしから目をそらしたまま

おもむろに口を開いた。

「この前のことなんだけど、

悪かつたな。」

「そうだよ。初めてだったのに。」

あんな風じゃなくて・・・

ちゃんと気持ちがつながってから・・・

つて言つた方がいいかな・・・

なんて思つてたら

雄輔の次の言葉にあたしは固まつた。

「もう、オレに近寄るんじゃないぞ。」

「雄輔・・・今なんて・・・？」

どういこと？」

あっけにとられたというか

びっくりしたというか・・・

まさか雄輔からそんな言葉が出るなんて。

なのに雄輔は、

「だからそのまんま。

オレの手の届くところには来んな。」

意味分かんない。

「でないとかかりをこれからも

傷付けちまう。

そんなことしたくねーから……」

そう言つて、雄輔はあたしを残し、

部室へと歩いて行つてしまった。

……何よ…それ。

「マネージャー！」

いつまでも運動場で立ちつくしてたあたしに

小塚先輩が声をかけた。

はっとしてあたしは声のした方を見た。

「何してんの？早く帰らないと……」

途中で言葉を切った小塚先輩。

ん？どうしたのかな？って思ったら

近付いてきた小塚先輩が

あたしの頬をそつと親指でなでた。

「雄輔に泣かされたの？

どうした？

代わりにオレが雄輔泣かしてやるけど？」

？

気付かないうちに

あたしの頬には一筋の涙がこぼれていた。

「ごめんなさい・・・何でも無いんです。

あ・・・もう帰りますから・・・。」

慌てて鞆を取りに戻ろうとするあたしの腕を

小塚先輩が掴む。

「そんな顔して戻らない方がいいと思うけど？」

「大丈夫です。」

無理に笑顔を作ってきたぱり言う。

「んじゃ、雄輔監禁して

みんなでシバくか。なあ？」

「いや・・・それは・・・」

いくらなんでも可愛そう。

「じゃ、マネージャーから聞こうかな。

オレはいいぜ。雄輔シバいても。

もちろん俊介も賛成だと思うけど」

.....

何としても聞くぜとほほ笑みながら

値を運動場に座らせた。

「なんかよく分かんないけど

近寄るなって言われただけで・・・」

さっさと帰りたいだったので

端的に答える。

「はあ？何それ・・・」

やっぱりこれじゃ分かんないか・・・

でも・・・

昨日のことは説明しにくいぞ・・・

「あの・・・自分でちゃんと話しますから

大丈夫です。」

「出来ねーから泣いてたんだろ？」

そりゃそうだけど・・・

「それに近寄るなって言われて

どうやって話すわけ？」

・・・

これから避けられるってこと？

今までそんなこと一度だってなかったのに。

らしくないよ・・・雄輔。

「じゃ、まず何で近寄るなって話になったの？」

「突然。」

「んー。その前に何かあったんだろ？」

「・・・・・・・・・・」

「何があつたか言えば分かるぜ？きっと。」

小塚先輩がじつとあたしの顔を見る。

「・・・・・・・・言えるわけない。」

ファーストキスを奪われたなんて。

黙っているあたしに小塚先輩は

小さくため息をついて言った。

「んじゃさ、多分雄輔は

マネージャーを避けるだろうし、

オレと付き合うつてどう？」

「んな冗談、言わないでください。」

「冗談じゃないけど？」

今このタイミングで口説くとは

どういう神経？

もしかして失恋したては

口説くチャンスと思ってる？

残念ながらそういうのは

あたしには当てはまらない。

よし！

雄輔に直接聞いてみるしかないか。

そう決めたあたしは勢いよく立ちあがった。

「先輩、ありがとうございます。」

今から追及してきます!」

いきなり復活してきっぱり言い放ったあたしに

小塚先輩は一瞬驚き、

「あ・ああ。」

と、曖昧な返事を返してあたしを見送った。

帰ろうとしていた雄輔の背中を見つめ

あたしは思いっきりその背中に向かって

かけ出した。

あたしとあんたの付き合いって

昨日今日じゃないんだかね。

甘く見るんじゃないわよ！

あたしの恋心を。

一方的に言われておしまいなんて

ありえないんだから！

「雄輔！ちよつと待つてよ！」

あたしは大声で叫びながら

雄輔を追っかけた。

でも、息切れ寸前。

目の前くらくら。

でも追いつかなきゃ、これから先

どうしても後悔する。

「近寄んなって言っただろ？」

眉間にしわ寄せた雄輔が

ため息をつきながら言った。

ちよつと・・・

何であたしがため息つかれるわけ？

「雄輔、勝手すぎ！」

「はあ？意味分かんねー。」

「あたしが何で近寄っちゃいけないのよ！」

一瞬間があいて

雄輔は答えを躊躇した。

「納得出来ないよ。そんなこと。」

あたしはまっすぐに雄輔を見つめた。

「今よりひどいことになりたくねーし。」

？

「お前には分かんねーの。」

「だから分かるように言つてよ。」

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

「自信ねーから。」

「何が？」

「だから、自分が大事だったら

オレに近付くな。」

「だから何でよ！」

イライラしながら雄輔に詰め寄る。

ギュッと拳を握りしめた雄輔は

いきなりあたしを抱きしめた。

そしてあっという間に唇が重ねられた。

何度も何度も向きを変え

むさぼるように口付ける。

あたしはギュッと歯を食いしばったまま

硬直していた。

「オレは行動に責任持てね！。

だから離れてろっつったんだよ。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

そんなこと……言われても……

納得できないあたしに雄輔は言った。

「そうやって歯食いしばってるあかりを

見たくねーんだよ。」

そのまま雄輔は全力でその場を走り去った。

.....

あたしは全く理解できない。

何なのあれ・・・

2回目は少し余裕もあつたけど

少なくともああいう一方的なのは

どうしても受け入れられない。

しかも雄輔の行動の意味も分からない。

とにかく、側に寄って欲しくないことだけは理解した。

もちろんそれに納得できるはずもないけど。

「マネージャー、ちょっと。」

悶々と過ごしていたある日

部活の最中にあたしは部長に呼ばれた。

「はい、なんでしょうか。」

「ちょっと部室来て。」

練習中に部長が抜けるなんて珍しい・・・

あたしは部長について行った。

「まあ座って。」

パイプ椅子に向かい合って座ると

部長は用件を切り出した。

「雄輔とは仲直り出来たか？」

・・・

「仲直りもなにも・・

喧嘩してないのに・・・」

「アイツの思い詰め方なあ、

ちょっとまずいんだよな。」

・・・・・

「最近特に態度ワリいし。

ま、それは前からだけだな。」

そう言って苦笑いする部長。

「マネージャーの仕事でもあんだよ。

メンタルケア。分かる？」

「分かりますけど、近寄るなっ……」

うつむいて言うあたしに

部長はいきなり笑いだした。

「アイツ、とうとうブレーキ壊れたか！」

あっけにとられるあたしに

部長はニコツと笑った。

「オレにも覚えあんだ。

まあ・・・・・・・・そういうことが・・・・・・・・」

一人納得した部長に

全く意味の分からないあたし。

何がどうしたって？

それからの雄輔は

普段通りにしているようでも

ぜ　　っ　　たいにあたしと目を合わせなかった。

それが次第に

あたしの中では不自然に重くなっていた。

なによ・・・

何拗ねてんのか知らないけど

そんなに拒否しなくていいじゃん。

寂しいじゃん・・・

日に日にその想いは大きくなっていく。

部活中はもちろんのこと

勉強してても雄輔が気になって仕方がない。

「みさと先輩、あたし、もう、限界!!！」

みんなが練習しているときに

あたしは先輩に愚痴った。

「なんであたし、避けられてんだと思います？

意味分かんないまま

ちつとも答えてくれないし

そんなの幼馴染のくせに

卑怯だと思いませんか？」

いきなり爆発したあたしに

ちよつとびつくりしたみさと先輩は

「なに？いきなり・・・まだ口聞いてなかったの？」

なんて目を丸くした。

「俊介が『あいつら両想いだからなあ』」

って、言つてたのはだいぶ前だったのに・・・」

「両想いもなにも・・・」

目も合わせてくれないんですよ！

ひどいと思いませんか？」

ぷーっとなら顔を膨らませて言つたあたしに

みさと先輩はフツと笑つて言つた。

「そのまま雄輔くんとか捕まえて言つてみたら？」

そう言うと、みさと先輩は

「ちょっと、雄輔くん！こっち来て。」

って、ランニング中の雄輔を部屋に引っ張ってきた。

「こら！マナージャー、

雄輔の練習メニュー、邪魔すんじゃない。」

意味深な笑いを浮かべて部長がみさと先輩に言った。

「急用なの！」

みさと先輩も意味深な目で部長を見る。

二人してニヤツとあやしい笑みを交わすのを見て

何だかちょっとうらやましかった。

ああいうのを

『目と目で会話する』

って言うのかなあ・・・

「なんですか・・・？」

みさと先輩に雄輔は問いかける。

もちろんあたしの方は一切見ようもしない。

あれだけ仲良かったくせに・・・

「あかりちゃんが君のこと

卑怯者って言ってたよ。そうなの？」

「「はあ？」」

思わずハモッてしまった・・・

そこだけ言いますか・・・先輩・・・

それはないでしょ・・・

「ちょっとまって！オレがいつ卑怯な真似したって？」

マジな顔して雄輔があたしに言った。

お——

久々の雄輔の直視。

こんな場面のくせにちょっと照れるあたし。

「おい！何とか言え！」

「は——い、続きは部屋でどうぞ

みんなびっくりしてるから

こんなところで大声出さないの

あかりちゃん、言いたいこと

ちゃんと言った方がいいわよ。」

みさと先輩は満面の笑みで背中を押した。

「ほら雄輔、マネージャーの言うこと

ちゃんと聞いてこい！」

「んなこと言われなくったって・・・！」

「「はいはい」「」

部長とみさと先輩に押し込まれるように

あたしたちは部室へと放り込まれた。

「で？オレが何したって？」

雄輔があたしの前に立ち問い詰める。

こういってこって昔から変わらないよね。

理不尽には正面切って立ち向かいたい所。

「何であたしを避けんのよ。」

静かに言つたあたしに雄輔が一瞬ひるむ。

「避けてんじゃなくつてなあ・・・」

「そんなのみずくさいじゃん。」

最近目も合わせてくれないし。」

「だからそれは・・・」

口ごもって言葉を濁す。

「あたし、耐えられないんだけど。」

ちゃんと目くらいあわせてよ。」

・・・

「ねえ！」

近寄って雄輔の顔を覗き込んだ。

「やめろ！」

そっぽを向く雄輔。

「イヤ！」

あたしは雄輔の顔を手で挟むと

「逃げてんじゃないよ！」

ってじっと見つめた。

「バカ……. ったく……. しらねーからな。」

いきなりぎゅっと抱きしめられて

息が止まりそうになった。

「暴走しねーようにわざと離れてたのに

その努力を無駄にしやがって！バカあかり。」

「それと無視してたのと何の関係が？」

抱きしめられた体制のまま

照れてやけに口が滑る。

それに動悸が……

「ほんと、ニブイのな。

勉強できるくせに、つとにバカなヤツ……」

「ほんとにバカな雄輔に言われたくないし。」

ああ……サラッとこういうかわいくないセリフが

どうして言えてしまうんだろう……

雄輔の胸がドキドキしてる。

そつとその背中に手を回すと

雄輔の腕に力がこもった。

「歯、食いしばられると結構へこむんだよな。」

苦笑しながら雄輔が言う。

「だって・・・緊張してたんだから。」

「今は？」

「今も・・・」

ふーーと大きく息を吐いて

雄輔はあたしから腕をほどいた。

あたし達は部室の長いすに座った。

ほんの少し距離を取って。

「自分で止められそうになかったからさ。

離れるしかなかったし。」

ちよつとさみしそうに言う雄輔に

思わずあたしは言ってしまった。

「止めなくていいのに。」

「は？マジで言ってるの？

っつーか、意味分かってる？」

驚きとからかいの色をたたえた目が

あたしの眼の奥を覗き込む。

至近距離。

大好きな雄輔の目。

まるで魔法にかかったかのように

自分で信じられない言葉が口から飛び出した。

「分かってるって。

雄輔ならいいよ……。

ずっと好きだったし……。」

その瞬間、あたしと雄輔の間に会った距離は

あっという間に縮められ

肩を抱き寄せられた。

「後悔すんなよ。」

「するわけないでしょ……」

「じゃ……」

「いいよな・・・」

小さくうなずいて

ドキドキしながら背の高い雄輔の顔を見つめ

そっと目を閉じたあたし。

今度はちよつと落ち着いて・・・

なんて思ってたら

ガタン！

と外で小さな音がした。

すつと体から雄輔のぬくもりが消えた。

立ち上がるといきなり

ガラッと部室の窓を開ける。

「うわぁ！」

飛びのくように散っていく人影。

「あいつら……」

苦笑いしながら雄輔はあたしを振り返った。

「部長たちに、はめられたな……」

「そうみたいだね……でも……」

言葉を切ったあたし。

大きく息を吸うと

「よかったんじゃない？」

ってにつこりした。

「いつまでも雄輔に避けられてちゃ

精神衛生上悪いし。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いい加減、態度決めねーと

ほんとに逃げられんぞ？」

突然部室の入口が開いて

部長が入ってきた。

「結構じれったい奴だったんだな。雄輔。」

からかうように言った部長に

「部長ほど軽くないし。」

と、拗ねたように言った雄輔。

「ちょっと強引な方が女の子って嬉しいのよお」

なんて後ろからみさと先輩も顔をだす。

「ねえ？あかりちゃん」

そこで同意を求められても・・・

ねえ？

「だいたいだなあ、男が逃げるなんて

ありえねーだろ！根性無しが！」

「んなこと言っただって、

責任取れねーもん仕方ねーだろ！

無責任なこと出来っか！」

「じゃ、責任もちゃいいじゃねーか。」

「取り返しのつかねーこと

しちまったらどうすんだよ！」

「つつーか、まだだったのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

聞いてる方が恥ずかしいよ・・・まったく。

「案外真面目君だったのね、雄輔くん。」

「普通だろ。」

「俊介ならそんな我慢は絶対しないよね。」

「とーぜん。」

ま、オレはそれで一度みさとに振られたんだっけ？」

ニヤツと笑って答えた部長は

しかし、きっぱりと言った。

「両思いなのに避けるなんて

バカとしか思えねーぞ。」

え・・・？

ってあたしと雄輔は顔を見合わせる。

両想いって・・・？

何で知ってんの・・・？

あたしだってさっき知ったところなのに・・・

「分かって無いのはお前らだけだ。」

ウソ……

あたし達はじつと顔を見合わせた。

「もー そんなに熱く見つめ合っちゃって

見せつけないで二人だけの時にしてよね」

みさと先輩にからかわれて

あたし達は真っ赤になった。

「さ、練習すっかな。」

照れ隠しのように言って

雄輔はグローブを手にとり

運動場のキャッチボールの集団に紛れこんだ。

「よかったね。あかりちゃん。」

みさと先輩が満面の笑みで声をかけた。

「はい！」

照れくさかったけど

めちゃくちゃうれしくて

あたしも満面の笑みで答えながら

ボールを投げる雄輔をじっと目で追っていた。

気まずい・・・

気まずい・・・

どうしてこんなに気まずいんだあ・・・！

今あたしは雄輔と一緒に電車に乗っている。

「なあ、ベタだけど映画でも行かねーか。」

何げなく誘われて出かけたけど

手・・・・・・・・・・

いきなり握られたまま

電車の中でもそのままで、

あたしはちよつと硬直していた。

そんなに混んでいない車内。

手、汗かいたらどうしたらいいの？

これ、いつ離すんだろう。

一緒に学校の行き帰りに二人で歩くのとは

何だか雰囲気違って、妙にぎこちない。

雄輔もさつきから遠くを見つめたまま

何も話さない。

あたしもこういう時、何話せばいいか分かんなくて

手の先に雄輔を感じつつ窓の外を眺めていた。

あたしはドラマも映画もあまり見なかったから

特に見たいものは無かったけど

雄輔はアクションものの映画で見たいものがあつたらしい。

「好きなを選んでいいぞ。」

って、言われたけど

二人でどんな顔して恋愛ものとか見りゃいいの？

ほんとはメロメロの恋愛物みたいけど

無難にシリーズもののアクション映画にした。

きつとこれ、雄輔好きだし。

館内はあまり混んでなくて、

人の少ない真ん中あたりに並んで腰を下ろした。

コーラとポップコーンを前に置いて

始まるまでの間、当たり前障りのない話をする。

「これ、雄輔見たことあるんでしょ？」

「ああ。前は、たしか決着が付かず終わってた。

ヒロインがさらわれたけど、

あれもどうなったか分からずじまいだったかな。」

「へえ……」

話しているうちに館内の証明が落とされた。

一瞬周りが見えなくなる。

・・・と、雄輔がちょっと体を浮かせた。

ん？どこかに行くの？

と思ったら、不意にあたしの目の前に

雄輔の影が覆いかぶさる。

一瞬何が起こったか分からなかった。

雄輔は何事も無かったかのように

また席に着いて前を向いている。

.....

あたしは、さっき一瞬通り過ぎて行った

唇への柔らかい感触と暖かさを

無意識のうちに左手でなぞっていた。

ドキッ.....

前を向いたままの雄輔の手が

そつとあたしの右手に重なった。

その手が触れた部分は

心臓のようにやけにドキドキした。

結局雄輔の手が気になって

映画には集中できずじまい。

アクションシーンではドキドキするものなんだろうけど

あたしはずっと別の意味でドキドキしてた。

長いこと一緒に大きくなってきたのに

友達でいるのと

こうやって付き合ってデートしてるのとは

全然違うんだね・・・

「腹減ったあ！」

映画の後、雄輔はいつになく優しい表情で

あたしを見つめた。

その眼差しにドキッとまた心臓がはねる。

ファーストフードのお店に入り

店内から通りを歩く人たちを眺め

ハンバーガーをむしゃむしゃ。

ま、大口開けて食べても

相手が雄輔だから

大丈夫でしょ。

こういうところは

幼馴染だと楽かも・・・

「雄輔、ちょっと海でも見に行く?」

「おう。」

地元には定番のデートコース。

そういえば、いつぞやの部長たちのデートは

海だったっけ……

シーズンオフの海は

優しく風いで、穏やかな時間が流れる。

大きな流木があつたので

その前に座るとちょうど背もたれみたいになった。

二人並んでじつと遠くの波を見つめる。

「静かだね……」

「そうだな……」

雄輔の腕が肩に回る。

スッと抱き寄せられて

一瞬体が固まったけど

そつと雄輔の肩に頭をもたれさせた。

ちらつと雄輔の顔を見上げると

照れくさそうにニッと笑ってた。

幸せ・・・・・・・・

何だか生まれて初めてそんな気がした。

10月になった。

あたりはすっかり紅葉に包まれ、

学校はというと文化祭の季節を迎えた。

あたしのクラスは

みんなのやる気と熱意で

なぜかファッションショーをすることになった。

しかも・・・！

「チャイナドレスがいいと思います！」

「AKBの仮装やりてー！」

「なでしこジャパンもいいんじゃないの？」

と意見が出て

「じゃ、誰が担当しますか？」

という委員長の発問に対して

男子がオレもオレもと名乗りをあげた。

・・・・・・・・

もしかして彼らにそういう気があったとか？

女子はひそひそと話してたら、

実行委員を引き受けていた西尾くん、

「お前らもやるんだぜ。」

とニッコリ。

「えーーーー！！！！！！」

と、大ブーイングをものともせず

A K B 4 0（うちのクラスは40人）ということで
フリフリキラキラの衣装を制作することになった。

スカート短いし・・・

こんなのみんなで着るの？

みんなで分担してミシン掛けをしながら

友達と愚痴る。

更にみんなの私服を持ち寄って

衣装合わせ。

「オレ、これにする！」

「んじゃ、オレはこれ！」

目をキラキラさせてスカートを身につける男子を

あたし達はあっけにとられて

見つめては、大爆笑。

「オレは絶対イヤだな。」

あたしの話を聞いて雄輔は苦笑い。

「あいつら、そんな趣味があったのか。」

「そういうわけじゃないらしいけど、

みんなでやれば怖くないみたいなの？」

「へー。」

「雄輔のクラスは模擬店すんだよね。」

「そ。聞いて驚け。ホストクラブだってさ。」

「は？なにそれ・・・絶対行くから。」

「・・・・・・・・・・」

雄輔は気乗りしないみたいだけど

お客に目いっぱい愛想ふりまいて

出来れば彼女ゲット　なんて

企んだりするらしい。

言い忘れてたけど

雄輔は花の男子クラス。

そりゃ、そういう企画で女子と触れ合おう！

という空気も分かる。

ふーん

ふーん

そうなんだあ
・
・
・

ちよつと複雑
・
・
・
・

「それから、オレ、バンドすんだあ

絶対見に来いよ」

「うそ・・・、雄輔音符読めなくせに？」

「うるせーよ・・・」

音楽のテストではいつも無きを見ていた雄輔。

ピアノが弾けるあたしと違い、

音符は意味が分からないらしい。

なのにバンド？

「何のパート？」

「ボーカル。」

「カラオケだと思えば雄輔でも出来るかもね・・・」

「お前なあ・・・」

ま、当日聞いて驚け！」

ケツケツケつと笑う雄輔に

「歌詞忘れちゃだめだよ。

何ならカンペ持ってたげよっか」

って言ったら、

「んなもんいるか！」

って、頭クシャクシャってされた。

「もー！やめてよ！」

って言いながらも笑いが止まらない。

雄輔がボーカルだってえ？

冗談！

文化祭は、結構カップルでの行動も出来る。

雄輔とあたしはかろうじてかぶっている

休憩の2時間を一緒に回る約束をした。

文化祭は一日あるのに

たった2時間しかないのも寂しいけど

ほなみと雄輔のクラスの模擬店に行く約束もしたし

とっても楽しみ

準備のかいあって

あたし達のクラスは

青いジャージのなでしこや

キラキラフリフリAKBやチャイナドレスに

メイド喫茶の店員、KARAAまで

さまざまな仮装が出来あがった。

BGMに合わせて踊る姿は

やってるあたし達も笑えた。

あつという間に文化祭は当日を迎えた。

準備は万端。

あたし達はご機嫌で衣装に身を包み

『いらっしゃいませ』

と、お客を呼び込みしていた。

結構好評で、ステージが始まるころには

教室は超満員。

大音量で音楽が流れるなか、

おそろいの衣装で全員がパティシヨンの陰から

みんなの前に飛び出した。

ワーという歓声を受け

あたしたちは曲に合わせて踊った。

あたし達よりも

男子がノリノリで踊ってた方が

みんなの注目と笑いを集めていたけど。

「可愛い〜!」

というお客さんの声にみんな気をよくして

このままの衣装で文化祭の

他の教室を回ることにした。

「きつと宣伝にもなるぜ。」

みんなも盛り上がる。

この一体感が文化祭のだいご味かもしれない。

あたし達は自分たちも爆笑しながら

それでも出番にはちゃんと真面目に

ステージをこなした。

「すっごい面白かった!!!」

という感想に満足。

30分の入れ替えを挟んで

第2回目のステージ。

噂を聞きつけた生徒たちが

ますます増えて、

教室はなんとも言えない熱気に包まれた。

そして、3度目のステージ。

ステージの最前列に雄輔がいた。

向こうもびっくりした顔してたけど

あたしはもっと驚いた。

だって………

雄輔の格好……

スーツ着てる……

しかもちよっと着崩して。

ヤンキー座りもさまになってる雄輔に

どうしても視線が行く。

目が合うと、ニヤツと笑ってた。

やりにくいなあ……

こんなブリブリの衣装だし……

KARAのまねしてお尻フリフリなんて

めっちゃ恥ずかしいんだけど……

あたしのキャラじゃないし……

ま、サッカー部やバスケット部の男子たちが

お尻フリフリしてるのよりは

可愛いとは思っけどさ。

ちよつと冷や汗かきながらステージが終わると

「すげー気合入ってんじゃん。」

つて、雄輔が声掛けてきた。

「その衣装、着たままで来いよ。」

なんて言つて雄輔は自分の教室へと戻つていった。

これから1時間の休憩。

あたしはほなみと一緒におそろいの衣装のまま

約束通り雄輔のクラスの模擬店へ。

「ちよつと……ここに入んの？」

「そう……だけど……」

ふたりして一瞬立ちどまったのは

入口の派手な装飾。

もう節電はいいのか？つてくらいピツカピカ。

誰かが家のクリスマス用イルミネーション、

全部くつつけたでしょ！

て感じ。

うーん、なにになに？

ワンドリンク制。10分一本勝負？

なんじゃそれ？

「いらっしゃーい！待ってたぜ」

いきなり両側から思いっきり背伸びした衣装の

男の子たちがやってきて

あたし達を中に強制連行。

「ち・ちよつとお！」

「まあまあ、そう言わずに」

ニツと笑ったのは野球部の沖田くん。

「げ・・何その格好・・」

「別人だねえ・・」

ちなみに沖田くんもあたしたちは

小学校の時から知っている。

心なしか、ほなみの頬が赤い。

「お！それ俺の客だから！」

嬉しそうな顔して雄輔がすっ飛んできた。

「こつちだ。」

有無を言わせずあたしの肩を抱いて

席までエスコート。

隣にはほなみと沖田くんも座った。

「来てくれてうれしいよ。」

「ゆっくりして欲しいとこだけど、

10分楽しんで行つてね。よろしく。」

甘々いほほ笑みを浮かべる雄輔と沖田くん。

以前買っていた食券のクリームソーダーを
オーダーする。

「その衣装、すごい似合ってるよな。」

スゲー可愛いよ。」

え？今の沖田くんのセリフ？

沖田くんって、そんなキャラじゃなかったよね・・・

ほなみは照れて真っ赤になっている。

ギョツとしたあたしに

「お前も可愛すぎ。」

このままどっかに消えてくくらいだ。」

なんて、じっと見つめられる。

な・・・なによ・・・これ・・・

不覚にも顔が赤くなるのが

どうしても止められなかった。

所詮模擬店って分かってんのに・・・

「さっきのステージもかわいかったなあ。

それに足も綺麗し」

ニコニコしながら沖田くんは

ほなみの目を覗き込んだ。

「ありがとう・・・」

トマトみたいになったほなみは

小さな声で言った。

「冷たいうちにこれ飲みなよ。

うまいぜ。」

雄輔に勧められてクリームソーダを

口にする。

「なあ、オレにも一口くれねー?」

そう言うと、雄輔はあたしの方に体を寄せ

ストローを咥えるとちゅつとジュースを飲んだ。

「あー!それあたしの!」

それって……あたしのストロー……

「おい……雄輔、やりすぎだって……」

沖田くんはちよつとびっくり。

「うるせー。いいの。」

ニツと笑ってあたしの肩を抱く雄輔。

……

思わず忘れそう……

ここが教室で、

今は文化祭の真っ最中で

これは模擬店で・・・ってことを。

ピピピピピピピピそこでアラームが鳴った。

「はい、ありがとうございました

また来てくれんの待ってるぜ」

ドキドキドキドキ・・・

あたし達は残っていたジュースを一気に飲み干し
教室から送り出された。

「すごいね・・・あいつら・・・」

「うん・・・」

はぁ・・・とため息ついて二人で顔を見合わせた。

振り返ると、目がハートマークのリピーターも

噂を聞いた生徒たちも

長い列を並んで待っている。

・・・

帰りがけにちらっと教室の中をのぞく。

雄輔たちはまた、新しいお客相手に

笑顔を振りまいていた。

なんとなく胸の奥がざわめく。

他の人に向ける笑顔が

胸の奥に突き刺さった。

文化祭の出し物だし……

仕方ないじゃん。

あれは作った笑顔だつてば。

必死に言い訳しながらも

分かっているけどドキドキしてしまった事実

どうしようもなく動揺させられた。

ほなみはというと・・・

「沖田のくせにあんなにカッコよく見えるなんて

反則だわ・・・」

って、ポ　　っとしてる。

あの気の強いほなみが？

「ほら、休憩終わるよ！

遅れちゃう、急ごー！」

あたしはほなみの手を引っ張って

教室へダッシュ。

心もちひきつった笑顔のまま

またワンステージこなしたのだった。

その後、多目的教室にほなみと行った。

今からバンドのステージが始まる。

「まさか、あの格好のままじゃないよね・・・」

「それはないでしょ。」

「お待たせしました！では・・・」

司会者が説明を始める。

大音量の音楽と共に雄輔たちが

ステージに飛び出してきた。

うわぁ！

実にコミカル……

ジーンにパーカー。

いつもの雄輔。

キラッと耳にはピアスが光る。

きゃあっ！……！……という黄色い声と声援に包まれ

雄輔はステージを駆け回る。

あら、一応ちゃんと音は合ってるみたい。

歌詞も覚えてるじゃん。

有名なバンドの曲をコピーして

会場も一緒に大盛り上がり。

会場の盛り上がりとは反対に

あたしはじつと雄輔を見つめていた。

グラウンドとは違う雄輔の姿に

正直、心を持ってかれた。

ベースやキーボードの子たちとの絡みも

コミカルでテンポがよくて楽しそう・・・。

「ありがとー！ー！！！」

満面の笑顔で手を振りながら

みんなの声援にこたえて退場する雄輔たち。

いつもと違う雄輔の姿。

昔から知ってる雄輔の顔じゃない。

あたしの胸は壊れたんじゃないかって思うくらい

ドキドキしっぱなしだった。

妙な高揚感の中、

あたしは雄輔との約束の場所に向かった。

約束してたんだ。

一緒に文化祭、まわろうねって。

「よっ！」

模擬店の衣装のまま

雄輔があたしに声をかけた。

一瞬心臓が飛び跳ねた。

この時間には、いろんな模擬店も

叩き売り状態になってくる。

売れ残りが出ないように

外に出て売り子をする人も出てきた。

「これどうですか？美味しいですよ」

女の子が数名、雄輔の前にやってきた。

雄輔はちらつとあたしを見ると

「どれがいい？」

ってあたしに問いかけた。

かごの中には数種類のクッキー。

「・・・・・・・・チョコのがいいかな。」

「んじゃそれ。」

雄輔が買ったクッキーを早速開ける。

「そこ座ろうぜ。」

雄輔に促され、ベンチに座る。

スーツ姿の雄輔がいつもと違って

大人びて見えた。

「ほら、食べよ。うめーぞ。」

「ありがと・・・」

ポロポロと胸のあたりに粉がこぼれた。

「こぼすんじゃねーの。」

雄輔が笑いながらこぼれたクッキーの粉を

胸元から払う。

「きゃっ！」

思わず小さく声をあげる。

だって・・・

胸元に触れた手の感触は

あたしにはあまりにも刺激が強すぎて・・・

しかもあたしも、雄輔のリクエスト通り

というか、時間ももつたいなくて

ステージ衣装のまま。

胸元は大きく開いて素肌だった。

いつきに鼓動が倍のスピードで打ち始める。

「あ・・・ワリい・・・」

真っ赤になったあたしを見て

雄輔も真っ赤になった。

「そんなつもりじゃ・・・」

二人真っ赤になったまま

「そろそろ、向こうで次のイベント始まるころかな。」

なんて立ち上がると

「行こ」

って、雄輔の手を引つ張った。

こんなとこにずっと座ってたら

心臓が持たない。

まだ胸には雄輔の手の感触が残ってて

じっとしてるわけにはいかなかった。

真っ赤になって死んじやいそう……

「そうだな……」

雄輔も立ち上がり、

にぎやかな音のする方へと視線を向けた。

2年生のどこかのクラスが

にぎやかにマイクで叫んでる。

「ぜひ参加したい方ないですかあ！

豪華な景品付きです！！！」

どうせ桜を仕込んでるとは思っけど

何人かがステージに上がる。

借り物競走みたいで、ステージ上のテーブルには

封筒がいくつも置いてあった。

それがまた、尋常じゃなくデカイ・・・

中には段ボールに書かれたお題が入っているらしい。
それを首にかけて借り物を探すそうだ。

「あんな格好して走るの無理だな・・・」

苦笑しながら雄輔が見物を決め込む。

「あたしはちよつと豪華景品が気になるけどな。」

くすつと笑ってスタートする人たちを見ていたら、

なんと・・・

とんでもない札が続出。

『学校中で、一番怖い先生。』

『他の人は知らない秘密がある人。』

『一晩一緒に過ごしたい人。』

『自分と体重の差が10キロ以上ある人。』

『学校中で一人しか出来ない特技がある人。』

『二股かけたことがある人。』

『キスのうまい人。』

『自分と両想いの人。』

・・・・・・・・

「これって、合格を誰が判定すんだよ・・・」

「マジ？」

舞台上では一瞬出演者がひきつった顔をした。

そりゃそうだろ。

どうやって探す？

誰が考えたか知らないけど

誰を連れて帰ってくるか楽しみ

・・・と、見物を決め込んでると

『一緒に来てください!』

一人の女の子が雄輔の前に立った。

「え？オレ？」

「はい、そうです！早く！」

勢いに押されて、

雄輔は彼女の後ろを走ってついて行く。

びっくりしたけど

そのあと、あたしは啞然とした。

彼女の首から下がっていたお題は・・・

「一晩一緒に過ごしたい人。」

・・・・・・・・

「なあ、怒んなよ。」

「怒って無い。」

「んじゃ、そんなにムスツとすんなよ。」

「してないでしょ！」

「ほらぁ・・・怒ってんじゃねーか。」

・・・・・・・・

怒るなって言う方が無理でしょ？

ステージに連れ去られた雄輔は

「いやぁ、公衆の面前での

『一晩一緒に！』宣言はいかがですか？」

と、司会者に問われ

祈るような視線の彼女に

「嬉しいです！」

と元気よく答えた。

そりゃね・・・

それ以外の答えは空気壊すよ。

分かってる。

分かってるけど・・・

あたしが怒るの、間違ってる？

「ほれ、これお前にやるから機嫌直せよ。」

と、雄輔は参加賞の可愛い付箋を差し出した。

あたし好みの甘い色合いの可愛い付箋・・・

だけど、それがあの

屈辱の時間の代償だなんて

見るのもイヤだと思っ たあたしは間違ってますか？

「そんなモノもらいたいわけないでしょ！」

あたしの雄輔が一瞬でも

他の子と並んでみんなの前にいたことが

どうしても納得できなかった。

ただのヤキモチって分かってる。

分かってるんだけど、

どうしようもないんだから仕方がない。

「ちょっと座れ。」

いきなり雄輔は近くの校舎の階段に

あたしを引っ張っていくと

グイッと引つ張って座らせた。

「何よ！」

自分の胸の嵐が抑えられず

そっぽを向くあたしに

雄輔はごく自然にあたしのあごに手をかけると

そのまま文句を言いかけたあたしの口に

そつと唇を重ねた。

．．．．．何この気持ち．．．．

す　　と怒りの塊がどこかに消えてく。

甘酸っぱい気持ちちが胸の奥から湧き出してきて

切なくなつた。

「心配すんな。

あかりしか好きになんねーから。」

耳元でそつと囁かれて

あたしはその甘さにクラクラ・・・

約束だよ・・・

絶対だかね・・・

「つとに……信じらんねー! さつさと来いよ!」

「んなこと言われても……!」

「いいから!」

ケータイを耳に当てながら

必死こいてあたしは改札を通り抜ける。

あー、

慣れないパンプスが走りにくい……!!!!

ホームからは電子音が聞こえて

「間もなく、列車が参ります……」

とアナウンス。

精一杯足を動かして階段を駆け上がる。

「あ・・すいません。」

雄輔が車掌さんに謝る。

体半分だけ電車に乗ってドアが閉まらないように

待っていてくれた。

「お前なあ・・・今日くらい早く起きらんねーか？」

動きだした電車の座席にぐったりと腰かけて

あたしは大きく息を吐いた。

いつしか必死の受験生生活も終わりを告げ

晴れて大学生となったあたし達。

入学式の朝、目覚めて慣れないスーツに身を包み
初めての化粧をして家を出た。

ちゃんと時間に間に合うように出たのよ？

間違いなく。

でもね・・・

「ヤダあア・・・電線・・・」

自転車のペダルにすっかり引っ掛けたストッキングは
遠慮なく電線を伸ばしてくれた。

慌ててコンビニでトイレを借りてはき変える。

でも、トイレで着替えなんて

メッチャしにくい・・・

しかもスーツ。

慣れないパンプス。

何とかはき変えて慌てて駅へ向かったけど

遅刻しそうになったのは突発的事故的せいだと思いたい。

だって……

伝線したストッキングで雄輔と歩ける？

おかげであたしは

あこがれのキャンパスライフを

雄輔のあきれ顔を見ながら始めることになった。

入学式を終え、

初めてのキャンパスを雄輔と散策する。

「君たち新入生だね」

「うち寄ってかない？」

「お菓子もあるよ」

わらわらと寄ってきた

先輩らしき人たちに囲まれて

びっくりしている間に

腕を取られ、椅子のあるところに

座らされた。

ん？

落研？

「一緒に寄席やんなーい？」

「やりません。」

あたし達は即答し、

さつさとその場から離れた。

「落研なんて、はやないよね。」

俺らとテニスで汗かこうや」

にこやかに寄ってきた

ちよつとイケメンなお兄さん。

あたしが口を開く前に

「ほら行くぞ！」

雄輔が腕を掴んで突っ切った。

時間的なものか、

学食には人がまばらだった。

あたしと雄輔は窓際の席に座って

自販機のコーヒーを飲んでいた。

「大学って、すさまじいね・・・」

「あかりがボーっと歩いてっからだ。」

何げなく言われて

ちよっとムカツ。

どっちへ行っているのか

まだ分かんないんだから

しょうがないじゃん。

「時間割、どうやって作るんだ？

意味不明なんだけど・・・」

受け付けで貰った大きな封筒の中には

来週までに時間割を作り

履修届を提出するようにと

たくさんの資料が入っていた。

雄輔が大きな表を見ながら

ため息をつく。

初めて見る大きな表に

どうしていいか分からず戸惑っていると

「あら、一年生ね？」

履修表で困ってるの？」

と、数人のお姉さんたちがやってきた。

「この先生ね、毎回レポートがあつて

結構大変だったよ。」

「あ、この授業は、

教授の書いた本読んどけば

楽勝で単位とれるからお勧め」

「この先生、面白いよお

しかもイケメンだし」

聞きもしないのに、あれこれと情報を教えてくれる。

で、

「あたしたち、軽音部なんだ

一緒にやんない？」

と、声をかけてきた。

「やんないけど、これ、

もうちょっとおせーてくんない？」

ニコツと笑って雄輔がお姉さんに言った。

「いいわよお

でも気が変わったら入ってね。」

と、お姉さま方は時間割を組み立てるまで

ああだこうだと教えてくれた。

おかげで仕組みを理解出来た。

出来たけど……

「サankyー おねーさん」

と手を振る雄輔と、

「またねー 雄輔くん」

と手を振り返すお姉さま方を

あたしは複雑な思いで見っていた。

「もしかしてさあ・・・」

「ん？」

帰りの電車であたしは気になっていたことを聞いた。

「軽音のおねーさんたちと

ケータイ番号とか交換してたでしょ？」

あそこ入ろうとか思ってたの？」

へ？って顔して雄輔が言う。

「んなわけねーだろ。」

オレ、入る部は決めてっから。」

「うそ・・・聞いてないけど？」

軽く落ち込む。

昔っから雄輔って自由なヤツだったけど

今も変わらない。

仮にもあたし、彼女だよね・・・？

教えてくれてもいいと思うけど？

「あかり、何年オレといるんだよ。

オレが野球以外するわけねーっの。

マネージャー、しっかりしろよ！」

そう言っただけでニッと笑うと

コッソリとあたしの頭を小突いた。

翌日、あたし達はグラウンドの奥にある

野球部を訪ねた。

「お！もしかして入部希望？」

わらわらつと雄輔の周りに人が集まる。

「野球やったことあんの？」

問われて雄輔は足もとに見えたボールを拾い上げた。

「ちょっと受けてくれる？」

そついうと雄輔は

担いでいた荷物をあたしに渡すと

グローブを受け取り

グラウンドへ。

バシツと心地いい音がして

雄輔の球が相手のグローブに収まった。

「へー、いい球投げるじゃん。」

「あんたもな。」

久しぶりのボールの感触が

嬉しくてたまらないような顔をして

雄輔が球を投げる。

懐かしい……

それに、やっぱり、カッコいいな……

あたしの甘い視線とは裏腹に

先輩たちは好奇の視線で雄輔を眺めていた。

「アイツ、ちょっと変わってんな。」

「あの、悠斗の球受けてんぞ。」

みんなが囁く中

雄輔たちのボールの速度は

みるみる速くなっていく。

「おつし！入部届け書いとけ。」

やがて戻ってきた雄輔は、

悠斗さんとやらにそう言われ、さらさらと名前を書いた。

「んで、もう一人いいだろ？」

「誰だ？」

「マネージャー。」

雄輔があたしに紙を回そうとしたら

ずっと悠斗さんにそれを引きあげられた。

「ワリいが、女は入れねー。」

「コイツはマネージャーとして・・・」

「だから女はいらねーつつてんの。」

・・・

「ここに女のマネージャはいらねーから。」

スパツと切り捨てられてあたしは

何一つ返す言葉が無かった。

「んじゃ、オレも・・・」

と言いかけた雄輔に

「いいよ。別に。応援くらいは

どこにいたって出来るし。」

そう言っであたしは雄輔の背中を叩いた。

「雄輔は野球やるって決めてんでしょ。

やんなよ。応援するからさ。」

そう言つてあたしは精一杯の笑顔を作つた。

* : . . 。 0 . : ' 。 * : . . 。 0
: ' 。 * : . . 。 0
* : . . 。 0
。 .

正直、あたしだってがっかりした。

高校時代を思い出して

またあんな風に一番近くで

雄輔のボールを追う姿を見てたかった。

ま、でも、今はつきあつてゐるわけだし、

男ばかりの方が

変な心配しなくていいかもしれないや。

そう思つてあたしは、

ずっとやりたかったバイトをすることにした。

「いらっしやいませ〜！」

念願だったファーストフードの店員さん。

やってみたかったのよね

制服も着てみたかったし、

そんなに難しそうじゃなかったし。

大学の近くのお店で採用になったあたしは

雄輔が野球してる間、

バイトに入った。

で、一緒に待ち合わせして電車に乗る。

これでお互い時間の使い方、

ばっちりうまく行くよね。

そんな風に思ってた。

実際、うまく行った。

最初はね・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1444v/>

この先の結末

2011年11月20日00時46分発行